

九

舌音にして單子音の一つ。

この濁音。

ど 門(名)

「一」家の入口。●月。●かど。●もん。「二」水流潮流の出入する處。●水門(みずかど)「瀬戸」明石の門「由良の門」

ど 戸(名)

入口などの蓋ひ。木材、硝子、金屬などにて作り開閉するやうになりたるもの。「格子戸」開戸(ひらく)「雨戸」

ど 外(ろ)

ほか。そこ。○「外つ宮」「外つ國」

ど 砥(名)

又物を磨ぐ石。

ど 徒(名)

黨與。●なま。●ともがら。●くみ。

ど 斗(名)

「一」斛目の名。十升をいふ。「二」筆の糸の名。第十一番目の絃。

ど 籐(名)

さうの略。籐細工「籐の椅子」

ど (名)

かくに井べて「さにもかくにも」など用ふる詞。……さかくを見よ。

ど 音(名)

おとの略。他の詞の下に來る時に用ふ。○

ど 兎(名)

「風のさ」斧のさ(歌詞)うさぎ。

ど 都(名)
ど 途(名)
ど 肚(名)
ど 十(數)
ど (後)

みやい。

みち。

腹。

さなの略。◎五の二倍。○十度(とたび)「十返」

「一」名詞を指定して動詞に結びつくるもの。○古今「山部赤人といふ人ありけり」

「二」章句を指示して動詞に結びつくるもの。○古今「一目見し君もやくるさ櫻花げふは待ち見て散らば散らなん」宇治「さて

は如何すべきさのたまひければ」(三)さなりてさとしての如くの意。○後拾遺「水もなく見ぬこそわたれ大井川峯の紅葉は雨さ降れども」古今「白雲のこなたかなたに立ち別れ心を幣さ碎く旅かな」(四)共に一處に同時にの意。○蝶さ狂ふ「人さ花を見る」

「五」に似たるもの。○後世さなりては「六」名詞さ名詞。又は動詞さ動詞の間さ後さに置きて、あれさこれさを並べて指定する詞。時によりてはおよび或はなどの意にもなる。……但し後に置くさ文字は略する事もあり。○古今「吹く風さ谷の水さし

ど 奴(名)
ど 弩(名)
ど 篠(名)

なかりせば深山がくれの花を見ましや「夏
さ秋さ行きかふ空の通路はかたへ涼しき風
や吹くらん」拾遺「日の内に再び物を思ふ
かなさくわけぬるさおそく暮るゝさ」(七)
さて爲めにの意。○古今「穗にも出でぬ山田
を守るさ藤衣稻葉の露にぬれぬ日ぞなき」
「八」さもさいふさもの意。○堀川「畫に
くさ筆も及べし少女子が花の姿をたれに見
せまし」(九)同じ動作を重ねていふ時動詞
と動詞の間に置きて意を強むる詞。○伊勢
集「時雨にしぬれぬれぬる言の葉は薄な
がらだに散らすもあらなん」枕「ありさあ
る人は姿形こそにつくろひ」(十)物事の状
態音響などを副詞とする時添ふるもの。○
「よろゝと倒れ伏す」「雨はらゝと來
る」「戸をさんくさ敲く」(十一)漢語よ
り來れる副詞の後に添ふるもの。○公然
こ「竊竊さ」
やつこ。●しもべ。
おほゆみ。●いしゆみ。
鰻など捕ふる竹罾。筥。

ど 度(名)

「一」分量を計ること。●程度。「二」物さし。
●尺度。「三」寒暖計の目印に附けたる段。
「四」天體地球の周圍を三百六十に分てる一
つの名目。「五」幾何學上圓き物の周圍を三
百六十に割りたる一つ。「六」たび。●かへ
り。○「度敷」「二度」「七」時代。●頃。○「天
保度の地震」「二十九年度の餘算」
どもに同じ。○「立てと立たれず」
●(後)
ど 植(名)
雨垂を受けて地上に送る溝または筥。●
覓。

ど ひ

ど ひ

ど ろ

ど いた

ど いた

ど いた

ど いた

ど いた

ど いた

ど いた

ど いた

ど いた

問(名) 問ふ事。●質疑。●問題。
土居(名) 城の周圍の塘。●家の周圍の土手。
戸板(名) 戸に作りたる板。●板戸。
戸板比目魚(名) 魚の名。比目魚に似て
特に大きく平たきもの。
ど いた どのやつ。●賤しめていふ詞。
ど ひ 何奴(代)
ど ひ や 問屋(名) 商品の賣買を媒介する店。
ど ひ まる 問丸(名) 問屋に同じ。
ど ひ あはせ 問合(名) 問ひ合はする事。
ど ひ あはす 問合(他動四段) 問うて懸合ふ。
ど い き 吐息(名) ためいき。●大息。

どろきん

斗爲巾(名) 箆の糸の名。斗は第十一、爲は

第十二、巾は第十三の紐。おの／＼別々なれども常に熟字の如くに並べ稱ふ。

どろし

砥石(名) ともに同じ。物を磨ぐ石。

どろ

瀨(名) 波の靜なること。又其靜なる處。……訛りてはどろと濁音にも云ふ。○熊野の瀨八町

どろ

泥(名) 土の水を糺りたるもの。●ひぢ。

どろろ

(名) 「一」 さら／＼じるの略。「二」 さら／＼あふひの略。

どろろぐ

(自動四段) さら／＼に同じ。○記「蛆たづれをろいきて」

どろろあふひ

黃蜀葵(名) 草の名。葵の一種にして根の粘液薯蓣汁に似たるもの。●異名は……ねり。●かうぞ。●たし。

どろろじる

薯蓣汁(名) 薯蓣を摺りて溶かしたる汁。常に麥飯に掛けて食す。●いもじる。

どろばう

(名) 盗人。(俗)

どろろろ

(副) 鈍く弛みたる有様。○「水さろ／＼流るゝ」火がさろ／＼燃ゆる」(又) さら／＼と。○「さろ／＼と眠る」

どろどろ

(副) 「一」雷などの響く聲。(又) 一／＼と。○「二」泥の如く溶けたる有様。(又) 一／＼と。

どろどろび

(名) 一／＼と火に同じ。

どろち

(名) 取る藕の約。◎鳥を取る料の藕。○神樂歌「湊田に鵠八つ居り。さろち無や」

どろり

(名) さろ／＼に同じ。(又) 一／＼と。

どろかめ

泥龜(名) すっぱんの一名。

どろかす

(他動四段) さろ／＼に同じ。

どろよけ

泥除(名) 車輪の廻りて泥土をはね上ぐるを防ぐ具。

どろんど

(句) 取らんとの轉。○神樂歌「鷺の頸さるんぞ」

どら／＼

徒勞(名) いたづらなる勞力。●むだ骨折。

どろく

盪(自動下二段) 「一」鐵物などの沸き溶けて流動體となる。○「二」心またば身體のしまりがゆるむ。

どろまみれ

泥塗(名) 泥にて塗らるゝ事。

どろめく

(自動四段) さろけて見ゆる。

どろみち

泥路(名) 泥にてさけたる路。

どろみつ

泥水(名) 泥交りの水。

どろし

(形。形狀言ク活) 鈍し。●のろし。

どろび

(名) 火氣の弱き火。

どぼ

驚馬(名) 鈍き馬。●へこたれ馬。●老衰せる馬。

どぼど

堂鳩(名) 堂などに飼ひおく鳩。●家鳩に同じ。

どぼり

戸張。帳(名) 戸の代りに張りたる布。●月帳。●帳。●垂布。

どぼりち

戸張帳(名) しばりに同じ。○催馬樂

どばかり

(副) 少しの間。●しばし。●暫時。○「我家はどばかりちやうなも垂れたるな」

どばん

土蠻(名) 土着の野蠻人。

どばく

賭博(名) ばくち。●博奕。

どばゑ

鳥羽繪(名) 筆意又は意匠に滑稽を帯びたる一種の粗畫。保延の頃鳥羽僧正覺猷の創めたる流派。

どばし

土橋(名) 土を盛りて作れる橋。

どばしり

(名) しばしる事。又さばしりたる物。

どばしる

(自動四段) 飛び走る。●飛び散る。●たばしる。●ばさばしる。

どばす

飛(他動四段) 「一」飛ばしむる。●早く行かす。●「二」抜かして先へ進む。○「順を飛ばす」

どに

(副) 未だ其時期の至らぬ先への意。●内に。●前に。……本居宣長曰く「どにを外への意として世の常には云々せぬ内にさいふ。其内にを外さうらうへに云ふ。古言の一格なり」○萬葉「我着子をなこそ山の呼子鳥君よびかへせ夜のふけぬさに」

どにかく

(副) どうにもかうにも。●何にせよ。●どちらにしても。●さもかくも。(又)「どにかに」

どにちかくにも

(副) さにかくに同じ。

どほ

徒歩(名) あるく事。●かち。

どほる

(自動四段) ともるに同じ。

どほそ

(名) 「一」(樞)戸に附けたるくろい。「二」(扇)戸びら。●戸。

どばう

途方(名) しかた。●方法。●所置。○「途方に」

どぼく

(自動下二段) 知らぬふりをする。●しらばつくれる。●はける。

どぼく

奴僕(名) 下男。

どぼく

土木(名) 家屋、道路、橋梁等の建築修繕。●工事。

とほけ

(名) とぼくる事。●ぼけ。●老耄。

とほし

(名) ともしに同じ。

とほし

乏(形。形状言シク活) 少なし。●稀なり。●不足して居る。●貧し。

とほしあぶら

(他動四段) ともしあぶらに同じ。

とほす

(他動四段) ともすに同じ。

とべ

戸咩(名) 土人の頭。●酋長。(紀)

とち

(名) 「一」ちい。小兒の呼ぶ詞。「二」男あるじ。

とち

(名) 「一」魚。小兒の詞。「二」酒。小兒の詞。

とち

止(名) つまり。●極點。

とち

度度(副) たびく。

とちう

都々(名) 小唄の一種。通例七七五と句

をなしたるもの。……「君に別れて松原ゆけば松の露やら涙やら」の類。

とちう

(副)

とちう

とちうとちう。●どうと。●響く程に。

とちう

(副)

とちう

とちうに同じ。○謡曲「五條の橋の橋板をさうろくさ踏み鳴らし」

とちう

とちう。●騒がす。

とちう

とちう(自動四段) 響きわたる。●とちうく鳴る。

とちう

とちう(自動四段) 響きわたる。●とちうく鳴る。

とちう

(他動四段) とちうかすに同じ。○記「踏み

とちう

さうろくし」

とちうめく

とちうめく(自動四段) とちうめくに同じ。○字

治「谷へとちうめきて逃げゆく音す」

とちう

(副) 戸を敲く音。○萬葉「檣の板戸をさうろくして」

とちう

(他動下二段) 「一」(留)跡に残す。「二」(止)や

むる。●中止する。●廢止する。「三」(停)

暫時見合さしむる。

とちう

渡唐(名) 唐土に渡る事。●入唐。△(動)―渡

とちう

唐す。

とちう

徒黨(名) 惡徒の團結。

とちう

怒濤(名) いかるる波。●大波。●荒波。

とちう

(自動四段) 肥満する。(字鏡)

とちう

(名) 調ふ事。●調理。●調整。●整頓。

とちう

(自動四段) とちうのふの延音。(古)

とちう

(他動下二段) 「一」揃へる。●順序立つる。

とちう

●整頓する。●準備する。●買ひ求める。

とちう

「二」人を呼び集むる。○萬葉「さいのふる

とちう

(軍勢を)鼓の音は」同「綱子さいのふる海

とちう

士の呼聲」

なりゆき

調(自動四段) 揃ふ。●順序立つ。●整頓する。●準備が出来る。

なりく

都督(名) 全軍の大將。●總督。

なりく

届(他動下二段) 「一」届かしむる。「二」官に報告する。○「出産を届け出たす」

なりく

届(自動四段) 及ぶ。●達する。●到り着く。留止(自動四段) 行くべきを行かすして同じ處にある。●やむ。

なりく

届(名) さいくる事。●届書。

なりく

届書(名) 官に届け出づる書面。

なりく

滞(名) さいこほる事。●故障。

なりく

進むべきものが進まずに止まり居る。

なりく

(名) 草の名。あまつらを見よ。

なりく

沙参(名) 草の名。釣鐘草。

なりく

止(名) 人を殺して息の根を刺しさむる事。○こころを刺す

なりく

(自動四段) 蟲く。●さわぐ。

なりく

椽(名) 木の名。其葉楳に似て栗の如き花咲くもの。實は椽餅として食ふべし。

なりく

土地(名) 「一」地球。●地面。●地上。「二」其地

なりく

方。

なりく

(名) ちちがめの畧。

なりく

綴(名) 綴づる事。●綴ちたる處。●綴方。

なりく

(名) 同士。●相親しむ友。○土佐「見渡せば松のうれごさに住む鶴は千代のごちごと思ふべらなる」源氏「いづれも」若きごちに

なりく

て」

なりく

(代) ぢぢらの略。○「ぢぢ附かす」

なりく

綴糸(名) 物を綴ち付くる糸。

なりく

綴本(名) 綴ちたる書物。

なりく

蕨(名) 水草の名。葉圓くして秋白き花咲くもの。花の形泥龜の脊に似たり。

なりく

椽粥(名) 椽の實を入れたる粥。○太平記「栗飯椽粥」

なりく

度牒(名) 人民の出家する時その僧尼の籍に入るを認可する官の免狀。

なりく

戸帳(名) しばりに同じ。

なりく

(代) 疑問の詞。下に「いづれも」の如くもの字を置けば確定となる。○何れの方。●どの方。●いづれ。●ごこ。

なりく

三五七

分する。●專斷に處置する。

とりはた

鳥肌(名) 鳥の皮膚の細く毛孔の立ちたる肌。

……寒き爲めに爲りたるをも又生來左様になるをも云ふ。●鮫肌。

とりはつし

取外(名) 取りてはむる事と外して除く事と。○「とりはつし」の出来る戸」

とりはつして

(副) 間違うたらば。●ひよつとして。●例外にて。○源氏「女は唯やはらかにて

とりはつしては人に欺かれぬべきが。云々。あはれにて」

とりはつす

(他動四段) 取らんとして外す。●放つ。●除く。●過つ。

とりはらひ

取拂(名) 取り拂ふ事。

とりはらふ

取拂(他動四段) 建物など取り除く。

とりはむ

取食(他動四段) 取りて食ふ。

とりばみ

鳥食(取食(名) おの／＼勝手に箸を入れ取りて食する方法の變態。……今の立食に似たるものか。○宇治「大饗はてゝとりばみ

さいぶものな」

とりながす

取逃(他動四段) 捕へんとして逃げしむる。

とりどり

(副) 様々。●種々。●思ひ思ひ。●いづれもく。●おの／＼。○謡曲「さりん／＼言葉の花も咲き」(又)「さりん／＼に。○源氏

「さりん／＼に捨てがたき世々」(△)形「さりん／＼」。

とりとり

取所(名) 「一」取手。●柄。「二」かりねに同じ。

とりちらす

取散(他動四段) 室内に諸道具など散亂さ

とりおひ

鳥追(名) 「一」田畑の作物に附く小鳥を追ふ事。「二」深編笠を冠りて三味線を弾きて門

とりおひぶね

鳥追舟(名) 船に附く小鳥を追ふ爲めに人の乗る舟。○謡曲「賤が鳴子田引きつれて。鳥追舟に乘らんさて」

とりおとし

鳥威(名) 田鳥を害する鳥を威す爲めに作りたる人形などの類。●案山子。

とりおとす

取落(他動四段) 「一」忘れて脱す。「二」誤りて途中などに落す。

とりおや

取親(名) 養父母。

とりおこなふ

執行(他動四段) 取扱ふ。●事務を執

とりおこなふ

執(他動四段) 取扱ふ。●事務を執

とりおさふ^{リッ}

る。●執行する。

取押(他動下二段) 「一」押さへる。「二」

捕縛する。●搦め捕る。●生捕る。

とりわく

取分(自動四段) 特別である。○謡曲「さて

はさりわきたる御馴染」

とりわけ

取分(副) 特別に。●殊更に。●別して。

とりわき

取分(副) さりわけに同じ。

とりか

取箇(名) 年貢の上り高。●物成。

とりかひ

鳥員(名) 貝の名。形赤貝に似て肉は鳥の質

に似たるもの。

とりかひべ

鳥飼部(名) 上古に鳥を飼ふを業とせし一

族。(紀)

とりかち

取舵(名) 船人の詞。軸を左に轉する時の舵

の取り方。

とりかはせ

取交(名) 取りまはす事。

とりかはす

取交(他動四段) 物事を交換する。○「證書

を取りまはす」約條をさりまはす

とりかかり

取掛(名) 手初。●發端。

とりかかる

取掛(他動四段) 爲し始むる。●着手する。

とりかた

捕方(名) 捕手に同じ。●捕吏。

とりがなく

鳥が鳴く(枕) 東の枕詞。

とりかふ^{リッ}

取替(他動下二段) 物と物とを替ふる。●

交換する。●交代する。

とりかぶ

鳥甲(名) 舞樂の時樂人ま

たは舞人の頭に着する鶏冠

に似たる冠。●舞のかしら



(圖)

とりかこ

鳥籠(名) 鳥を入れて飼ふ籠。●さりこ。

とりかへ

取換(名) 取換ふる事。又取換ふる物。

とりかへし

取返(名) 取返す事。●恢復。

とりかへす

取返(他動四段) 再び元の如くにする。●

恢復する。●取戻す。

とりがしらのたち

鳥頭太刀(名) 昔し鷹飼の佩きたる

太刀 柄の先に鷹鷲の頭を造りたるもの。

とりよろふ

(他動四段) よろふ。●足り整ふ。●形の

完備する。●打揃ふ。○萬葉「大和にば村

とりよろう

度量(名) 「一」物さしと構と。「二」大きく

廣き人の心中。

とりよく

努力(名) 力を盡す事。●盡力。△(動) 努力

す。

とりよす

取寄(他動下二段) 我方に寄する。

とりたつ

取立(他動下二段)

〔一〕特別に撰抜する。●

特別に注意する。●立身する。〔二〕租税な
ごを徴收する。

とりたて

取立(名) 取立つる事。

とりたすき

鳥糞(名) 古代模様の名。縦横の波線の中
に尾の長き鳥を二羽向き合はせたる形。

とりぞめ

取染(名)染物の一種。五色の細筋をおしよせた
る絞染。

とりつたふ

取傳(他動二段) 取次ぐ。

とりつむ

取詰(他動下二段) 事を急激に爲す。

とりつむ

取詰(自動下二段) 逆上する。●病の危篤に
なる。

とりつく

取付(自動四段) 〔一〕纏り付く。〔二〕事を爲
し始むる。●取掛る。〔三〕悪靈などの人に
附きて崇りをなす。

とりづく

取次(他動四段) 〔一〕物を一方より取りて一
方に渡す。〔二〕來客と主人との間に用事を
傳ふる。

とりつくふ

取繕(他動四段) 繕ふ。●修繕する。●執
成す。●綱縫する。

とりつき

取付(名) 取り付く事。

とりつぎ

取次(名) 取り次ぐ事。又取り次ぐ人。

とりづき

鳥月(名) 四月の異名。

とりなは

捕繩(名) 罪人を捕縛する繩。●早繩。

とりなきぬ

鷄鳴(名) 催馬樂の曲名。

とりなし

執成(名) 執り成す事。

とりなす

執成(他動四段) 其場を言ひ繕ふ。●取繕ふ。

とりむく

〇枕「行成朝臣のとりなしたるにや」
取向(他動下二段) 手向く。〇萬葉「幣さ
りむけて」

とりむすぶ

取結(他動四段) 約束など確かにする。

とりうち

鳥打(名) 〔一〕弓束の一名。(夫木)〔二〕鳥を
鐵炮にて打つ事。●遊獵。

とりうちばうし

鳥打帽子(名) 帽子の一種。頭の鉢な
りになりて底の外に縁なく遊獵などに被る
もの。

とりのかさ

鳥司(名) 鳥の中の長の意。〇鷄の異名。

とりのか

〇新續古今「此頃は鳥の司も告げ絶てて我
と驚く曉の夢」
取除(他動下二段) 除き去る。

とりのか

取除(名) 取除くる事。●取除けたる物事。

●例外。

とりの子

鳥の子(名) 〔一〕鳥の幼兒。〔二〕卵。〔三〕鳥の子紙の略。

とりの子色

鳥の子色(名) 玉子色。●淡黄色。

とりのがみ

鳥子紙(名) 紙の名。雁皮と楮と合はせ漉きたるもの。玉子色を主とする故に云ふ。

とりまち

酉町(名) 酉の祭の約。○東京にて十一月酉の日に行ふ大鷲神社の祭禮。此日商人は熊手を買ひ祝ふの習あり。

とりのあし

鳥跡(名) 文字の異名。○支那の上古に蒼頡といふ人鳥の足跡を見て文字を作り始めしといふ故事。○古今序「鳥の跡ながく留まれらば」

とりのあそび

鳥遊(名) 鳥を捕る遊樂。(記)

とりのあしぐさ

升麻(名) 草の名。高さ三尺位にて葉に麻に似。花は粟穂に似て白く夏の初めに咲く。根は鬚多く藥種となる。

とりくつき

鳥來月(名) 四月の異名。

とりくむ

取組(自動四段) 互に組み付き合ふ。●相手になる。●相撲を取る。

とりくみ

取組(名) 取り組む事。●相撲の一勝負。又其相手。○「面白き取組」

とりくび

未轅(名) 未の轅。○鳥の頸の形したる故にいふ。(和名抄)

とりぐす

取具(他動サ變) 取揃ふるに同じ。

とりや

鳥屋(名) 鳥を賣買する家。

とりやり

取遣(名) 取る事と遣る事と。●贈答。

とりやる

取遣(他動四段) 取除くる。●かたづくる。

とりまちつき

○源氏「まざるゝ物ごもりやりたれば」

とりまほし

鳥待月(名) 四月の異名。

とりまほす

取廻(名) 取り廻す事。●周旋。●舉動。

とりまき

取廻(他動四段) 其座を周旋する。

とりまき

取卷(他動四段) 四方より圍む。●取圍む。

とりまき

取卷(名) 取り卷く事。

とりまき

取給(自動二段) 紛る。

とりけし

鳥毛(名) 鳥の毛にて作れる鎗の鞘。

とりけす

大名の行列に立

とりぶね

てい持たせたるもの。○「大鳥毛」

とりけし

取消(名) 取消す事。

とりけす

取消(他動四段) 打消す。●抹殺する。

とりぶね

鳥船(名) 鳥の飛ぶ如く足早き船。(紀)

とりぶすま

鳥姦(名) 丸瓦の一種。反りて履形になりたるもの。

とりこ

虜(名) 戦争の時生け捕りたる敵人。

とりこ

鳥籠(名) とりかごに同じ。(雅)

とりこ

取子(名) 貰ひ子。●養子。(枕)

とりころす

取殺(他動四段) 悪霊などの所爲にて人死に至らしむる。

とりこむ

取籠(他動下二段) 取りて押し籠め置く。

とりこむ

取込(自動四段) 己れの方に取り入るい。●手に入るい。●外にあるものを内に入るい。

とりこむ

(自動四段) 混雜する。●繁忙になる。●こたつく。

とりこみ

取込(名) 取り込む事。●混雜。

とりこし

取越(名) 取り越す事。

とりこしぐらう

取越苦勞(名) 先の先まで心配する事。

とりこもる

取籠(自動四段) 神佛などに參詣する。

とりこす

取越(他動四段) 爲すべき時よりも前にするをいふ。●繰上げる。

とりえ

取得(名) 其物の長所。●特點。

とりて

捕手(名) 罪人を捕ふる人。●捕方。●捕吏。

とりで

砦(名) 要害の固めに築きたる櫓。●出城。

とりあひ

取合(名) 相互に取らんとする事。●ばひあひ。

とりあはせ

取合(名) 取り合はする事。●取り合せたる様子。●配合。

とりあはせ

鶏合(名) 鶏を蹴合はす遊び。昔し幼帝の御時は三月三日に内裏にて行はれたるもの。

とりあはす

取合(他動下二段) 「一」程よく合はする。●配合する。●調合する。「二」妻す。

とりあつかひ

取扱(名) 取扱ふ事。●處置。●待遇。

とりあつかふ

取扱(他動四段) 手に掛けて世話をする。●處置する。●ばからふ。●待遇する。

とりあふ

取合(自動四段) 關係する。●かいりあふ。

とりあぐ

取上(他動下二段) 「一」紙き所の物を手に取る。「三」出産の時生兒を取扱ふ。「三」

官長より臣民の物を奪ひ取る。●沒收する。●褫奪する。「四」人の言ふ事を聞き入るい。

●受理する。

とりあげば

(名) 出産の時産婦と生兒との世話なすを業とする女。●産婆。

とりあげうば

(名) とりあげばに同じ。

とりあげあほし

(名) 公家元服の時初めて冠る烏帽子。
(義經記)

とりあへず

不取敢(副) 取るべきものも取らずに。●
直に。●早速に。

とりあみ

烏網(名) 鳥を捕ふる網。●さなみ。

とりさばき

取捌(名) 其事を處分すること。●判断。●
判決。

とりさか

鶏冠(名) ささかに同じ。

とりさかのり

鶏冠海苔(名) ささかのりに同じ。(和名
抄)

とりさた

取沙汰(名) 評判。●噂。●風説。●風聞。

とりさふ

取支(他動下二段) おさへる。●喧嘩の中
裁をする。

とりさへ

鳥刺(名) 鳥竿にて小鳥を取るを業とする人。
取切(他動四段) 全く我物とする。●事有す
る。

とりさむ

取極(他動下二段) 定むる。●決定する。

とりさめ

取極(名) 取極むる事。●決定。

とりゆ

(名) 雅樂の箏の手の名。左の手にて糸を押す
こと。○源氏「とりゆの手つき」

とりめ

鳥目(名) 病の名。夕刻より目の見ぬ病。

とりみだす

取亂(他動四段) 「一」姿をくづす。「二」心
を混亂さす。「三」取散らす。

とりみの

鳥簀(名) 能装束の名。鳥の羽もて作れる如
くにしたる腰簀。

とりしば

(名) 鳥柴に同じ。(夫木)

とりしばる

(他動四段) 握り詰むる。○記「劍の手上
さりしはり」

とりしつ

取垂(他動下二段) 垂らす。○神樂歌「櫛葉
に木綿さりしでー」

とりしらべ

取調(名) 調査。

とりしらぶ

取調(他動下二段) 調ぶる。●調査する。

とりしまり

取締(名) 監督する事。又其役。

とりじもの

鳥自物(形) 鳥の如く。○萬葉「鳥じもの
海に浮きぬて」鳥じもの朝立ち行きて」

とりひき

取引(名) 商業上の詞。金錢物品の受渡し。

とりもどす

取戻(他動四段) 取返す。

とりもち

鳥藕(名) 鳥を捕ふる藕。

とりもち

取持(名) 取り持つ事。

とりもつ

取持(他動四段) 「一」手に取りて持つ。「二」
饗應の席にて飲食など勧めもてなすを云
ふ。「三」中に立ちて執成す。●媒介する。

とりもなほ^オず (副) 其儘直に。

とりもの 採物(名) 神樂歌の一部の名稱。櫛、幣、杖、篠、弓、鉦、杓など手に採りて舞ふ時の曲。

とりもの 捕者(名) 捕縛せらるゝ罪人。

とる 取(他動四段) 「一」手に受くる。●つかむ。●握る。●持つ。●手に入る。●我物とする。●得る。●我方に來らしむる。「二」(捕)とらふる。「三」(執)取り行ふ。「四」去る。●除く。「五」殺す。●誅す。「六」意味なく動詞の上に添ふるもの。……「取り認む」「取り装ふ」の類。

とる 弗(名) 英語より來る。◎米國貨幣の價。とを (十(數) 五の二倍。●じふ。とを (遠(名) 遠き事。○「遠の朝廷」^{みやこ}とを (遠(形) 遠きに同じ。○「遠山里」「遠村里」

とを (遠(形) 遠遠し(形。形狀言シク活) 遠い遠い。○記さばくし越の國に」

とを (遠(形) 遠遠し(形。形狀言シク活) 疎々し。●遠疎な。

とを (遠(名) 遠き路。●遠方。○風雅「雲間もる入日の影に數見わたる」の空を渡る雁

とを (通(名) 「一」通る事。●流通。●通用。「二」人の通路。●本通り。●大通り。「三」組。●揃ひ。○「洋服一通り」

とを (通(副) 如く。○「人のする通りすべし」「願の通り」又「通りに」

とを (通(名) 「一」通字に同じ。「二」通稱。通字(名) 其家に代々傳へて附け來れる名の一字。……平氏にて清盛、重盛、宗盛など、附くる盛の類。

とを (通(自動四段) かなたよりこなたに働の届く。●通ずる。●貫かる。●刺さる。●透く。●過ぐる。

とを (副) たわいに同じ。しなふまでに。●ひわく。○萬葉「秋萩の枝もこたをに置く露の」

とを (十(名) 「一」一日を十合はせたるもの。●十晝夜。……月の一日より十日間を上る十日さいひ。十一日より廿日までを中の十日さいひ。廿一日より月末までを下の十日さいひ。「二」月の十日目。

とを (副) たわいに同じ。しなふまでに。●ひわく。○萬葉「秋萩の枝もこたをに置く露の」

とを (十(名) 「一」一日を十合はせたるもの。●十晝夜。……月の一日より十日間を上る十日さいひ。十一日より廿日までを中の十日さいひ。廿一日より月末までを下の十日さいひ。「二」月の十日目。

とを (副) たわいに同じ。しなふまでに。●ひわく。○萬葉「秋萩の枝もこたをに置く露の」

とを (十(名) 「一」一日を十合はせたるもの。●十晝夜。……月の一日より十日間を上る十日さいひ。十一日より廿日までを中の十日さいひ。廿一日より月末までを下の十日さいひ。「二」月の十日目。

とを (副) たわいに同じ。しなふまでに。●ひわく。○萬葉「秋萩の枝もこたをに置く露の」

とを (十(名) 「一」一日を十合はせたるもの。●十晝夜。……月の一日より十日間を上る十日さいひ。十一日より廿日までを中の十日さいひ。廿一日より月末までを下の十日さいひ。「二」月の十日目。

とほ^オがる

(自動四段)

遠しと思ふ。

とほ^オがくる

遠隠(自動下二段)

遠く隠る。○落窪「す

こしとほがくれて見たるに」

とほ^オかみみため

(名)

「一」龜卜を爲す時。その兆の

龜甲に現はるゝ場所を示すために云ふ詞。

すなはち龜甲の真中に堅筋を附くる方を登

さいひ。上の方を保さいひ。其筋の中央より

少し上の方の右へ横に筋を附くる之を加

美さいふ。又中央より少し下の方へ左へ横

に筋を附

くる之を

恵美さい

ひ。其加

美と恵美

さの中の

立筋を多

米さいふ。

「二」轉じて神道黒住派の祈念の

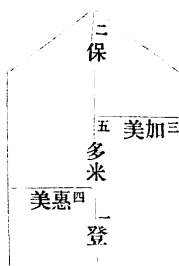
詞となる。更に附會して遠神笑み給への意

と爲す。

とほ^オかえびす

十日恵比須(名) 一月十日に行はるゝ

恵比須祭。此日參詣せし人は色々の物を買



とほ^オかさかけ

とほ^オかみかろう

とほ^オをよる

とほ^オぞく

とほ^オつ

とほ^オつおや

とほ^オつかむおや

ひ歸りて祝ふ習なり。小唄に「十日恵比須

の賣物は。小判に金箱立烏帽子。米糺さい

づちたばれのし」とあるにて其一斑を知る

べし。

遠笠懸(名) 笠懸の一種。

遠神講(名) 神道の一派。黒住宗忠を祖

としとほかみみための文句を念佛の如く

稱ふるもの。

(自動四段)

「一」挽み寄る。●しなふ。●靡

き寄る。○夫木「なよ竹のさをよる風」續

今古「小夜千鳥さをよる沖に」「二」竹なご

の挽み寄る如くしなやかなるを云ふ。○萬

葉「なゆ竹のさをよる皇子」

遠退(自動四段)

遠ざかる。●遠のく。○萬

葉「妹が門いやさほうきぬ」

遠津(形)

遠きに同じ。○「遠つ人」遠つ沖「遠

つ國」

遠祖(名)

先祖。(萬葉)

遠津神祖(名)

遠祖に同じ。○萬葉「大

伴の遠つ神祖の奥つ城はしるくしめたて人

の知るべく」

とほつかみ

遠神(名) 人に遠くして神さましますの意。◎天皇。(萬葉)

とをくら

十列(名) 十騎づゝ並が乗るものにて競馬の類。賴朝の時代しぼく鶴岡八幡の社前にて行はれたり。○夫木「千早振る神のゆふして引きかけて今日はこさなる十列の馬」

とほつくに

遠國(名) 遠き國。●ふんごく。(萬葉)

とほつま

遠妻(名) 遠くに離れて居る妻。(萬葉)

とほつひと

遠つ人(名) 遠方の人。○「昔の人。(歌詞)」

とほつひと

遠つ人(枕) 「二」遠つ人の歸るを待つるの意にて松にかゝる枕詞。○萬葉「遠つ人松浦の川に」「二」雁は春遠き國に行きて秋歸り來るものなれば旅人に比して遠つ人雁さつゝくる意の枕詞。○萬葉「遠つ人獵道の池に」

とほがな

遠名(名) 遠く響きたる名。(萬葉)

とほなけ

遠投(名) 遠き處に向ひて弓射る事。●遠矢。

とほらか

(和名抄)

とほやかに同じ。(形)―とほらかなる。(副)―とほらかに。(雅)

とをむ

(自動四段) 撓む。(萬葉)

とほむら

遠村(名) 遠き村。

とほのり

遠乗(名) 遠方まで馬にて乗り歩く事。

とほのく

遠退(自動四段) 遠さかる。

とほのみかど

遠朝廷(名) 朝廷より遠き地方にありて政事を執り行ふ官廳。……太宰府、國司廳などの類。

とほや

遠矢(名) 「一」遠方に向ひて弓射る事。「二」遠矢を射る名人。

とほやか

遠き有様(形)―とほやかなる。(又)―とほやかに。(雅)

とほやまどり

遠山鳥(名) 山鳥に同じ。此鳥は雌雄隔たりて住む故に云ふ。(歌詞)

とほやますり

遠山摺(名) 「一」衣の模様は遠山の形を染むる事。「二」特には藍にて此模様を染むる小忌衣を云ふ。●青摺。

とほあさ

遠淺(名) 海濱より遠くまで底の淺き海。

とほさ

遠さ(名) 遠き事。

とほさかる

(自動四段) とほのく。●遠く隔たる。●疎遠になる。

とほむらひ

遠侍(名) 武家邸内の一室の名。中門の際の廊にありて當番の侍の詰め居る處。

とほ^オぞく

(他動下二段) 遠く隔たらしむる。●疎遠にする。●疎んずる。

とほ^オきき

遠聞(名) 遠くにて聞く事。

とほ^オめ

遠目(名) 「一」遠き處を見る事。「二」遠き處のみ見ゆる一種の眼病。

とほ^オめがね

遠眼鏡(名) 遠方の物を近く見する眼鏡。

とほ^オみ

遠見(名) 遠方を見渡す事。又は之を番なぞする人。

とほ^オみち

遠路(名) 長き道。

とほ^オみけ

遠御饌(名) 御饌を行く末長く祝ひて言ふ詞。(祝詞式)

とほ^オみみ

遠耳(名) 感覚の鈍き耳。

とほ^オし

筈(名) 目の粗き飾。

とほ^オし

通(名) 通す事。●物を止めずに續けてする事。

とほ^オし

遠(形) 形状言ク活) 距離のある。●時の長き。●奥の深き。●間の疎き。

とほ^オしろし

(形) 形状言ク活) 遠くまでいちじるくあざやかに見ゆる。●はっきりしたる。○續

世繼「大納言の御車の紋こそきらいかにさほしろく侍りけれ」

とほ^オびと

遠人(名) 「一」高齢の人。(紀) 「二」遠方に住

とほ^オす

通(他動四段) 通らしむる。●通り貫かしむる。

とほ^オすめろぎ

遠天皇(名) とほつかみに同じ。

とほ^オに

(副) さきはに。●さこしへに。●常に。●永久に。○伊勢「風ふけばさには波こそ岩なれやわが衣手のかわく時なき。

とわたる

「一」疾く渡る。○新古今「此ゆふべ降り来る雨は彥星のわたる舟の櫂のしづく。」

……雅言集覽に曰く「此歌赤人集にはさくく船のさあり。又萬葉にははやく船の櫂の散りかもさあるをかく改め入れられしにて疾く渡る意なるべし」「二」海また河の門を渡るの意。●海を渡る。●河を渡る。●航路を行く。○夫木「淡路島わたる雁の」

とほ^オすがたり

(名) 人から問はれざるに自らする物語。●獨り話。

とか

都下(名) みやこ。●府下。

とが

榊(名) 木の名。樅の種類。つがさといふ。

とが

咎。科(名) 「一」過。●罪。●犯罪。●罪科。「二」

瑕瑾。●非難。

どがい

渡海(名) 船にて海を渡るこゝ。●航海。

どがにん

科人(名) 犯罪人。

どがち

兎褐(名) 兎の毛を糸に交ぜ織りたる物。(和名抄)

どがり

鳥狩(名) 鳥を狩ること。●特には鷹狩。○萬葉「雨の降る日なごがりすこ」

どがり

尖(名) 尖ること。●鋭き物の先。

どがりや

尖矢(名) 矢の一種。矢の根の尖りたるもの。羽は鷹



の羽にて四つ立に作る。(圖)

どがる

尖(自動四段) 物の先の鋭くある。●鋭く立つ。

どがた

料(名) 家の柱の上の四角なる木。○斗枅の形に似たる故にいふ。(和名抄)

どがむ

咎(他動下二段) 非なせむる。●非難する。●糺す。●怪しむ。●反動する。

どかく

兎角(副) 「一」さにかく。●かれこれ。あちこち。●あれやこれや。「二」ともすれば。●やゝもすれば。

どがま

土竈(名) どがますみの略。

どがますみ

土竈炭(名) 炭の一種。竈の蓋を開きて焼

どかげ

蜥蜴(名) きたる質の脆きもの。「一」守宮の一名。○多くは月の陰なごに居る故にいふ。「二」又蛇に似て小さき足ある爬行動物。常に石垣の間などに住むもの。

どかげ

常陰(名) 日影のいつもさゝぬ處。●山の谷陰の處。○萬葉「ものいふのいせの森の時鳥今も鳴やぬか山のさかげに」

どかげいろ

蜥蜴色(名) 染色の名。黒色の青みがかりたるもの。

どかへり

十返(名) 「一」同じ事を十回繰返す事。「二」特には松の花の事に云ふ。……さかへりのはなを見よ。○新拾遺「久に經ん友さや君に契るらん十かへりの松の花の咲くまで」

どかへりのはな

十返花(名) 松に咲く花。松は百年目に一度。すなはち千年間に十度花咲くこの傳説によりて云ふ。されは大方祝言の意味にて和歌に用ひ來れり。

どかへる

十返(自動四段) 「一」同じ事を十回繰返す。「二」特には松の花の咲く事に云ふ。……さかへりの花を見よ。○新後撰「松の花十返り咲ける君か代に何をあらそふ鶴がよはひ

さかへる

ぞ

(自動四段)

鳥かへるの略。◎「一」鷹の毛の抜けかへるを云ふ。○金葉「ばし鷹の白斑に色やまがふらんさかへる山に霞ふるなり」◎「二」又鷹の飛び歸るをも云ふ。

さかき

概(名)

斗搔の意。◎概にて物を量るとき其上の平均をとる棒。●概搔き。●搔平し。

さかめ

咎(名)

咎むること。●非難。●譴責。●詰問。

さかみ

相(名)

戸上の意。◎門の樞の上に横たへたる梁の木。●鼠走り。

さかす

溶(他動四段)

溶解せしむる。●ゆるむる。●さらす。

さよ

豊(名)

「一」總て物事の満ち足る事。「二」豊年。●豊作。

さよ

豊(形)

た・美稱として用ふる形容詞。○「豊旗雲」豊葦原「豊みてぐら」豊御酒

さよ

(感)

句の終に置きて嘆の意をあらはす詞。或時はよに同じく又さ言ふ事よと思はるゝよなどの意なるもあり。○堀川「櫻花山路も見ぬず散りにけり是より春は暮れゆくさよ」謡曲「是なる籬の梅の花が。弱法師が

さよいは

豊磐隠(名)

神の名。朝廷の御門を守る神。(祝詞式)

さよはたぐも

豊旗雲(名)

旗の如く夕空に棚引く赤色の雲。○萬葉「わたつみの豊旗雲に入日さし今宵の月夜あきらけくこそ」

さよたり

豊鳥(名)

鶏の異名。

さよをかひめ

豐岡姫(名)

神の名。天照大神の一名。又一説には豊受姫命。○神樂歌「みてぐらはわれにはあらず天にます豊岡姫の宮のみてぐら」

さよら

豐浦(名)

仲哀天皇の皇居の名。

さよむ

(他動下二段)

さよましむる。

さよむ

(自動四段)

鳴り響く。●轟く。●さよむ。

さよらう

土用(名)

「一」曆の詞。四季の終りに各十八日間づゝある季節の名。すなはち春は立夏前の十八日。夏は立秋前の十八日。秋は立冬前の十八日。冬は立春前の十八日なり。「二」特には夏の土用をいふ。○「土用休み」「土用干」

さよらう

土曜(名)

一週の日第七日目。

とようばき

土用掃(名) 夏の土用中に行ふ煤掃。
土用干(名) 夏の土用中に行ふ衣類書籍等
の出干。

とようぢびど

豊氏人(名) 祭典に奉仕する氏人の美
稱。●神官。○夫木「神風やみつのかしは
の秋の色に豊氏人の袖さへぞ照る」

とようやすみ

土用休(名) 夏の土用中にある官吏の賜
暇。および學校の休業。

とようけ

豊受(名) 神の名。米穀を司る神。伊勢の外
宮に祭られ給ふ是なり。(記)

とようけびめ
とようさぶらう

豊受姫(名) 神の名。豊受到同じ。
土用三郎(名) 夏の土用の入りて後の
三日目の日。此日の晴雨により農家にては
米作の豊凶を知る。

とよのとし

豊年(名) 豊年。○萬葉「新らしき年の始
に豊の年しるすこならし雪の降れるは」

とよのあかり

豊明(名) 豊は美稱。明は酔ひて顔の赤
くなる事にて宴會の意。「一」朝廷にて百官
群臣に宴を賜ふ事。即ち總べての節會の古
名。○六百番歌合「むづきたつ今日の遊や
百敷の豊の明の始めなるらん」「二」特に

とよのあかりのせちあ

豊明節會(名) 新嘗祭。大嘗祭
の時に行はるゝ宴。……とよのあかりを見
よ。

とよのあそび

豊遊(名) 神遊。●神樂。○神樂歌「笹
の葉に雪降りつもる冬の夜に豊の遊をする
む樂しむ」

とよのゆき

豐雪(名) 豐年の兆の雪。○夫木「龜山や大
内山を見渡せば二尾に満てり豐の雪にも」

とよのみそぎ

豐御祓(名) 大嘗會の時の御祓。十月鴨
の河原にて行はる。○後拾遺「世にさよむ
豐の御祓をよそにして小鹽の山の御幸をや
みし」

とよのみや

豐宮(名) 豐受大神の宮。すなはち伊勢の
外宮。(續後撰)

とよのみやび

豊宮人(名) 豊明節會に奉仕する舞姫。(後拾遺)

とよむ

(自動四段) ●さむ。(紀)

とよあづしま

豊秋津島(名) 日本的美稱。秋津島を見よ。

とよあしはら

豊蘆原(名) 日本的美稱。葦原のつ國を見よ。

とよあかのぼるに

豊榮登(副) さまさかのぼる如く盛に。(祝詞式)

とよあかのぼる

豊榮登(自動四段) ゆたかにさかぬのぼるの意にて朝日、君が代などを讚美する時に用ふ。○金葉「曇りなく豊榮登る朝日には君が仕へん萬代までに」

とよあめ

(自動四段) 響き轟く。●ごや／＼音のする。●騒く

とよみてぐら

豊幣帛(名) 幣帛の美稱。○萬代「神祭る豊みてぐらのゆふしでを枝にかけても咲ける卯の花」

とよみち

豊御酒(名) 酒の美稱。○萬葉「相飲まむ酒ぞ此豊御酒は」

とよひる

豊日雲(名) 神の名。天照大神の一名。

とよもす

(他動四段) さまましむる。土臺(名) 「一」家屋の礎石の上に横たへたる横木。柱を受くるもの。「二」總て物事の大本。

とどい

●基本。●基礎。

とどち

鳥立(名) 鷹狩にいふ詞。狩場にて池、草村などに諸鳥を集るやうにしおきて其飛び立つ折に鷹を合はする其處。○新古今「御狩野はかつふる雪に埋もれて鳥立も見ゆす草かくれし」

とたる

(形) 富み足るの意。新築の祝言などに用ふる詞。○記「とたる天の新巢の煤の」

とたな

戸棚(名) 戸のある棚。(名) 金屬の名。亞鉛。

とたん

土壇(名) 土にて築きたる壇。

とだん

(名) 跡絶の意。◎半途にして絶ゆる事。●中絶。

とたえ

(自動下二段) 半途にして絶ゆる。●中絶する。

とたびのみな

十度の御名(名) 十返念佛を稱ふる事。十念に同じ。

とれ

(代) 疑問の代名詞。いづれ。●どちら。(俗) 屠蘇(名) 其年の邪氣を掃ふて正月元日酒に入

とそ

れて飲む藥の名。

どそつ

兜率。都率(名) どそつてんの略。

どそつてん

兜率天。都率天(名) 佛法にて云ふ天の一

つ。

どそう

抖擻(名) 梵語の頭陀^{づだ}を支那にては抖擻と譯

す。●世捨人。

どそう

土藏(名) 土にて塗り固めたる倉庫。●つちぐ

ら。

どさう

土葬(名) 死體を土中に埋葬する事。●火葬、水

葬など、に對していふ。△(動)——土葬す。

どそく

土俗(名) 其土地の風俗。●土地風。

どそく

土足(名) 泥土の附きたるまゝの足。●草鞋、下

駄など履きたる儘の足。

どつ

閉(他動上二段) 鎖す。●塞ぐ。

どつ

綴(他動上二段) 縫ひ合

はする。●縫ひ續

くる。●綴る。

どつ

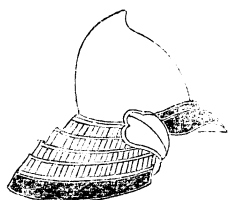
閉(自動上二段) 鎖さる

い。●塞がる。

どばく

兜鑿(名) 兜の一種。

鉢の形桃なりにて



どばいあほし

其先の尖り前の方へ向きたるもの。(圖)

どばひやろ

(名) 折烏帽子の一種。(體)

(感) 能、狂言、芝居などの囃

子の笛の音調をあらはしたる

どつべん

訥辨(名) 辨舌の爽かならぬ。●不辨舌。

どつち

(副) 多人數一度に發する大聲。○「どつち笑ふ」

「かゝりどつち」

どつち

(代) 疑問代名詞。どちら。●いつれ。

どつはもの

利兵(名) 銳利なる兵。●精兵。(紀)

どつかはまゆみ

十津川眞弓(名) 大和の十津川より産

する弓。

どつかつるぎ

十握劍(名) 十握ある程の長き劍。(紀)

どっかん

呐喊(名) 軍中にて聞の聲をあぐる事。△(動)

一呐喊す。

どつたり

(名) 捕手。

どつぐ

嫁(自動四段) 結婚する。●嫁する。●嫁に行

く。○著聞「番が妹にまつきてけり」

どつく

(自動四段) 届くに同じ。●達する。○盛衰「馬

の足のどつちんぼは」

どつに

外國(名) 「一」都下の地ならぬ國。(紀)「二」



我國以外の國。●異國。●異邦。●ぐわいこく。

どくけん

突貫(名) 敵軍を突き通して進む事。△(動) — 突貫す。

どくり

徳利(名) にくりに同じ。

どくり

(副) にくさ。●よくく。○「どくり考へて見よ」(又) — にくくりさ。(俗)

どくこ

(感) 物を仕損じたる時などに言ふ掛聲。

どて

把手(名) 物の柄。又はつまみ。

どさり

(副) たくさん。(俗)

どき

突起(名) 骨などの突き出でたる處。

どけ

嫁(名) 結婚。●嫁娶。

どけぬね

嫁時(名) 女子の嫁ぐへき年頃。●婚期。

どけをしくどり

(名) 鶴鶴の一名。(日本記私記)

どしつ

突出(名) 突きいづる事。△(動) — 突出す。

どしみや

外宮(名) 「一」伊勢の外宮。「二」離宮。

どせん

突戦(名) 敵軍に突き入りて戦ふ事。△(動) — 突戦す。

どっせん

突然(副) 不意に。●不圖。●だしぬけに。(又) — 突然さ。(又) — 突然に。

どね

刀禰(名) 「一」朝廷に奉仕する人の總稱。……官吏を始め下賤の男女までも含む。「二」村長。郡長の類をも云ふ。○「縣の刀禰」郷の刀禰。「三」轉じては賤しき人の稱となる。

○神樂歌「伊勢島やあまのこれらがたく火の氣」

どねり

舍人(名) 「一」天皇および皇子の御傍近く召し

仕ひ給ふ小官。武家の小姓に似たるものあり。「二」隨身。○徒然「たッ人も舍人など賜はるきはゆいしと見や」。「三」貴人の車に従ふ牛飼。また馬の口取の男。○平家。(佐々木高綱頼朝の名馬を盗み來れりと語る處に)「曉立たんとの夜。舍人に心を合はせてさしも御秘藏の生喰^{いけつき}を盗みすまし

どねりこ

石檀(名) 木の名。葉は檀に似て。實は鶯色にて穗となり垂るゝもの。皮よりは藥または膠を製すべし。

舍人子(名) されりに同じ。(萬葉)

どねりこまひ

舍人相模(名) 國々の力士を集むるにはあらで禁中舍人の内より撰び出だして取ら

する相様。(空穂)

散位寮(名) さんゐれうに同じ。

刀福争(名) 古代男子の遊戲の名。或は

枕引、腕押、などの如き力競へならんとも云

ひ。又は庄屋拳ぢやけんなどの類にやまも云ひて詳

ならず。

土鍋(名) 土製の鍋。

隣(名) 我家に接して左右にある他人の家。●

すべて我物の前後左右に接する事。○「隣の

娘」冬の隣」

(他動四段) 大聲を發する。●罵る。(俗)

隣(自動四段) 我身の前後左右にある。●接し

てならぶ。

(代) どの方の約。◎疑問代名詞。●誰の尊稱。

何れの御人。

稱。唱(他動下二段) 「一」口に出して言ふ。

「二」呼ぶ。●名づくる。●しよす。「三」誦

し讀む。

唱星(名) 昔し正月元日に天皇が星の名

を唱へ祈念し給ふ事。

稱(名) となふる事。●呼方。●讀方。●名。

となめ

譬喏(名)

蜻蛉の雄と雌と互に尾をくはへ合ふ

事。……神武天皇は大和の地形を御覽して

「蜻蛉あきつのとなめせるが如し」と宣ひし事あ

り。

となみ

鳥網(名)

鳥を捕ふる網。

門波(名)

海の門の波。○久安百首「播磨湯明

となみはる

鳥網張(名)

鳥網を張るまゝの坂と掛る

枕詞。○萬葉「となみはる坂手を過ぎ」

とら

虎(名)

猛獸の名。亞細亞大陸に産する肉食獸に

して其形猫に類し。毛の色黄にして茶を帶

び黒色の斑文あり。性猛惡。時に人をも害

とら

寅(名)

「一」十二支の第三番目。「二」方角の名。

真東と東北との間。「三」時刻の名。今の午

とら

銅鑼(名)

佛法にて用ふる樂器の名。

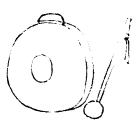
唐金にて丸く作り撥にて打つ

もの。(圖)

渡來(名)

外國より海を越えて來る事。●舶來。

○「佛教の渡來」



となへ

となふるほし

となへふツツ

となた

とたる

となる

となり

となべ

とねあらしミ

とねのつかさ

さらはる

四(自動下二段) 捕へらるゝ。●生捕らるゝ。

さらはれ

四(名) 「一」捕へらるゝ事。●幽囚せらるゝ事。●二捕はれたる人。●囚徒。

さらはれびど

囚人(名) 捕へられたる人。●囚徒。

さらかす

蕩(他動四段) 「一」本心を失はする。●二本の形を失はする。●さろけさす。●熔かす。

さらんでん

團亂旋(名) さらでんに同じ。

さらふ

捕(他動下二段) 「一」取り抑ふ。●生捕る。●捕縛する。●二執手を取る。●つかむ。

さらのを

虎尾(名) 「一」草の名。虎の尾の如き穗を出だして紫色の花咲くもの。●二櫻の一種。

さらのがく

虎斑の如く疎に花咲くもの。

さらのまき

度羅樂(名) 耽羅國より渡來せし音楽。虎の卷(名) 「一」兵法の奥義を記したる巻物。即ち太公望の著したる六韜中の虎韜の卷。●二すべて秘傳書。

さらく

(自動下二段) さろくに同じ。

さらげ

虎毛(名) 虎の毛の如き斑點。●虎斑。

さらふ

虎斑(名) 虎の毛皮の如き斑。●虎毛。

さらへ

執所(名) つかまへどころ。●おさへどころ。●證據さする點。●源氏のかの一夜

さらへ

ばかりの御文をさらへどころにかこちて」
囚人(名) 捕はれたる人。(和名抄)

さらでん

團亂旋(名) 雅樂の曲名。獅子と共に殊に秘曲として重んずるもの。

さらす

取(他動下二段) 取らしむる。●與ふる。

さむ

止留(他動下二段) 「一」止まらしむる。●停止する。●禁制する。●抑留する。●二泊らしむる。●宿らしむる。●三跡に残す。

さむ

認(他動下二段) 物を當處にして尋ねる。●神樂歌「櫛葉の香をかぐはしみさめくれば八十

さむ

氏人ぞ圓居せりける」

さむ

富(自動四段) 豊になる。●金持になる。●所有物の多くなる。●物事の充満する。

どん

鈍(名) 愚。●馬鹿。△(形)鈍な。●鈍に。

どん

頓に(副) 俄に。●急に。

どん

蜻蛉(名) さんぼうの略。

どん

蜻蛉返(名) 蜻蛉の身を交はす如く顔を下にし足を空にしてひっくりかへる事。●ちゆうがへり。

ほん

蜻蛉結(名) 紐の結び方の名。蜻蛉の形

に似たるもの。(圖)

どんぼう

蜻蛉(名) 虫の名。水虫より化

して空中を飛び翔る六足四翅
の小虫。夏より秋にかけて多

い。古言にはあきづといふ。



さんざ

(副) 丸で。●少しも。○「さんざ知らなんだ」

(俗)

(名) 左義長の一名。

さんざん

(副) 水などの音。○「さんざん落つるは瀧の

水」(俗)

さんざん

(副) 戸など叩く音。(又)さんざん(俗)

さんざん

(名) 水の落ち合ふ所。●落合。(俗)

さんざん

(副) 太鼓、水などの音。

さんざん

(感) さんざんの轉。◎諸曲翁に「あけまし

やさんざやひろばかりやさんざや」さある

は。催馬樂に「總角やさんざんひろばかり

やさんざん」さあるを本文に取りて意味も

無き難し詞さしたるものなり。……さんざ

うを見よ。

どんち

頓智(名) 即坐に出づる智恵。●機轉の利く事。

どんちやちり

緞帳(名) 引幕を用ひす。●揚幕にてす

どんちやく

頓着(名) 執着。●關係。●配慮。△(動)―

頓着す。

どんちやく

貪着(名) 女色に溺るゝ事。(佛教)

どんよく

貪慾(名) むさぼる心の深き事。●大怒。

どんねる

(名) 布子の下品なるもの。

どんねる

隧道(名) 英語より來る。地中を堀り貫きた

る道路。……おもに瀧車道に云ふ。

どんな

(形) 疑問形容詞。どのやうな。●如何様な。

どんな

如何なる。△(副)―どんなに。

どむらひ

(名) 「一」訪人を訪ふ事。●訪問。●見舞。

どむらひ

「二」(弔)死人の家を見舞ふ事。●悔み。三

どむらひ

(弔)死者の祭。●法事。●追善。[四](弔)

どむらひ

葬式。

どむらひがっせん

弔合戦(名) 戦死者の靈魂を慰むる

ための復讐の合戦。

どむらひがっせん

弔(他動四段) 「一」訪人を尋ねる。●見

どむらひがっせん

舞ふ。[二](弔)死人の家を見舞ふ。●悔を

どむらひがっせん

言ふ。[三](弔)死者の祭をする。[四](弔)

どむらひがっせん

葬儀を営む。

どんぐり

團栗(名) 橡栗の音便。◎橡の實。

どんぶり

井(名) どんぶりばちの略。

どんぶり

(副) 重きものゝ水に陷る音。△(又)ーどんぶり。

どんぶりばち

井鉢(名) 「一」深き厚き瀬戸物の食器。

「二」井鉢に盛りたる食物。○「鰻の井」井を好みて食ふ」

どんこん

鈍根(名) 心根の愚鈍なる事。○發心集「鈍根無智なりとも卑下すべからず」

どんてん

曇天(名) 曇りたる空。●曇りたる日。

どんざ

頓挫(名) 文法上の詞。文勢の俄に躓き挫けて他に轉する事。

どんじ

豚兒(名) 手紙にて我兒を卑下し言ふ詞。豚の兒の如き者の意。

どんじ

遁辭(名) 逃口上。

どむしろ

簾筵(名) 簾にて造りたる筵。

どんしうぼだい

頓證菩提(句) 死者を弔ふ廻向の文句。早く悟りて佛智を得よの意。

どんじんち

貪嗔癡(名) むさばる心さ、いする心さ、愚痴なる心さ。○撰集抄「さんじんちの村雲

おほひ」(佛教)

どんじき

屯食(名) 昔し祝儀の時など貴人より下々の人に賜はりたる食品。……貞丈雜記に曰く

「屯さいふは。にぎり飯の事なり。源氏物語きりつばの巻にどんじき祿のからびつさあり。孟津抄にいふ。屯食つゝみいひともいふ。下郎に給はる強食鳥の子なりとあり。貞丈云強飯を握りかためて鳥の玉子の如く丸く少く長くしたるをいふなり。今も公家方にては握食をどんじきさいふ由京都の人

物語せり」

どんじき

鈍色(名) にびいろ。

どんし

頓首(名) 男子書簡文の終に書く詞。頭を地に低れて拜するの意。

どんび

(名) 鳥の名。鷲に同じ。

どんび

豚尾(名) 「一」豚の尾。「二」支那人の髻。○豚尾に似たる故に云ふ。

どんびだこ

鳶風(名) 鳶の一種。鳶の形に造りたるもの。

どんびやビョウ

頓病(名) 俄に起る病。●急病。

どんせい

遁世(名) 世を遁れて僧と爲る事。●出家。

△(動)ー遁世す。

どんす

緞子(名) 緞子の類にて最上等の織物。

どう

籐(名) 植物の名。熱地に産し皮肉共に編物に用

ふ。Ⅱこに同じ。

どう

頭(名) 「一」藏人頭の略稱。……藏人の頭にて

中將を兼ねたるを頭中將といひ。辨官を兼ねたるを頭の辨といふの類。「二」歌合などの時の總裁役。左方にも右方にも一人づゝあり。○榮花「左のさうには繪所の別當藏人の少將」「三」獸類を數ふる詞。○「牛二頭」「馬三頭」

どう

等(名) きだ。●格。●階級。○「等を進む」

どう

統(名) すち。●血筋。●系統。

どう

燈(名) ともし火。●あかり。

どう

讀(名) 文章にて句の中のみきり。又其のみきりの處に打つ點。

どう

杜宇(名) ほとぎす。

どう

藤(名) 藤原氏の略稱。○「源平藤橘」

どう

等(助名) じも。●なご。●ら。

どう

(副) 疾くの音便。○徒然「たちあかしさうよ」

どう

(他動四段) 「一」(問)聞く。●尋ねる。「二」(訪)人を音づる。」「三」(申)死人の跡をさむら

どふ

(後) と言ふの略。Ⅱてふちふに同じ。○萬葉大

丈夫の行くさふ道すおほらかに思ひて行くな大丈夫のさも」

たう

黨(名)

組。●群。●仲間。●黨派。●徒黨。榮、露などの類の花を持つべき莖。○「露の莖」

たう

唐(名)

「一」支那にて唐の代。●唐朝。●唐代。

たう

當(名)

「一」適當。●至當。「二」會をすべき順番の宿。○「連歌の當にあたつて」

たふ

盜(名)

ぬすみ。●ぬすびと。

たふ

答(名)

「一」こたへ。「二」意趣返し。○落窪「是が答にいみじく調じ伏せて」

たふ

塔(名)

五重三重などに作りたる寺の建物。あかりれ。

どう

童(名)

わらは。●子供。采を入る、筒……雙六などの。○源氏

どう

幢(名)

佛事に用ふる旗



どう

胴(名)

の一種。(圖)

「一」身體の頭、手、足を除きたる部分。

●からだ。「二」鎧にて胴を被ふ部分。○

「桶革胴」「三」擊劍道具にて胴を被ふ部分。

革または竹を編みて作る。「四」鼓、太鼓な

ごの體。又轉じては鼓の意。

どう

動(名)

身動き。●感動。

だう

堂(名)

「一」大きな建物。●殿。「二」寺にて本

尊を安置する家。

たうい

搦衣(名)

砧にて衣を搦つ事。和歌の題にては

秋のものとて冬の衣の準備をするよしに

用ふ。

どうい

同意(名)

「一」同じ心。●同情。●同じ意見。

「二」同じ意味。●同義。

たういそくめ

事。

當意即妙(句)

當座に頓智の利く

たういん

唐音(名)

「一」支那の唐朝時代の發音。「二」

支那の發音。

たういん

導引(名)

按摩の療治。

どうろ

燈籠(名)

さうろうの略。

どうろ

頭顱(名)

あたま。●首。●さうへ。

たうろ

當路(名)

その路にあたる事。

だうろ

道路(名)

みち。

たうろん

討論(名)

双方互に論じ合ふ事。

どうろう

燈籠(名)

すべて紙を張りたる中に火を燈す

器。○「石燈籠」○「盆燈籠」○「切籠燈籠」

さうろう

登樓(名)

樓に登ること。

さうろうばな

燈籠花(名)

草の名。曼珠沙華の異名。

たうは

黨派(名)

一群の組合。●仲間。●徒黨。

たふば

塔婆(名)

卒都婆。●塔。

どうはい

同輩(名)

身分の同等なる者。

どうばち

銅鉢(名)

佛事に用ふる樂器の名。●讀經す

る時に叩く鉢。

たうばり

(名)

賜はりの音便。○賜はりもの。●恩賜。

たうばる

●祿。○大和「正月の加階たうばりの事」

(他動四段) 賜はるの音便。○催馬樂一應の

子はまろにたうばらん」

どうばた

幢幡(名)

佛事

に用

ふる

旗の



一種。●まるばた。(圖)

どうはつ

頭髮(名) 髪の毛。

どうばし

銅鍍子(名) 佛事に用ふる樂器の名。眞鍮にて作りたる小形の鍍鍍びんばちの如きもの。●銅拍子。

銅鍍びんばちの如きもの。●銅拍子。

たうばん

當番(名) 番にあたる事。●當直。

どうはん

同伴(名) 同道。●同行。●みちづれ。

どうばん

銅版(名) 銅の板に文章畫圖を彫刻せしもの。

どうに

(副) 疾どくどの音便。●既に。●早くより。●前より。

どうにょ

童女(名) 女の子供。●少女。

どうにん

頭人(名) かしら。●なま。●頭取。

どうにん

桃仁(名) 桃の實。

たうにん

常人(名) 其人。●本人。

どうぼ

同母(名) 同じ生母。●同腹。

たうほん

唐本(名) 支那より舶來の書。

たうばう

逃亡(名) にげうする事。●かけおち。

どうばう

同胞(名) 兄弟姉妹。●はから。

どうばう

童坊・同朋(名) 足利義滿の時に能役者などな剃髮せしめ將士を會する時の取持役に充

てたるもの。徳川時代に云ふお坊主お茶坊主。

どうほく

東北(名) ひがしきた。

たうほく

唐墨(名) 支那より舶來の墨。

たふッべん

答辨(名) 返答して辨明する事。●いひひらき。△(動)―答辨す。

どうへん

同邊(名) 同狀。●異狀なきこと。……おもに病人の容體に云ふ。

たうど

唐土(名) 支那。

どうど

(副) 物の落ち。倒れまた崩れかゝる響。●波の音。●濯の音。●風の音。

どうどり

頭取(名) かしら。●なま。●親分。

どうどう

東頭(名) 寺院にて前住を東頭といひ。當住を堂頭といふ。

どうどう

鑾鑾(副) 太鼓の音。ごんく。(又)―さうさうこ。

どうどう

(副) つまり。●終には。●結局。(俗)

たうたう

滔々(形) 水の淀みなく流るゝ有様。(又)たうくさ。

どうどう

同等(名) 同じ等級。●同格。

たうどう

堂頭(名) 東頭を見よ。

たうちたらりたらりら

(感) 音楽の翁にて謠ふ文句。

鼓の音を表せしとも云ひ。笛の譜を表せし

とも云ふ。

たうとく

道德(名) 人倫の道。●徳行。●徳義。

たふとし

尊貴(形) 形状言ク活 たの字の部を見よ。

たうち

當地(名) 此土地。

たうち

湯治(名) 療治のための入湯。

たうちめん

唐縮緬(名) 縮緬に似せて織りたる唐糸の織物。

たうて

唐朝(名) 支那の時代の名。高祖より僖宗まで十五代の間。

たうちやう

道場(名) 〔一〕寺。〔二〕武藝の演習場。

たうちく

當直(名) 當番。○宿直。

どうちんかう

透頂香(名) 痰の薬の名。外郎薬。○昔し應安年中に支那人禮部員外郎陳宗敬といふ人の渡來して傳授せし薬なれば。その官名外郎を用ひ支那音にてうゐらうぐすりともいふ。後世相州小田原の宇野氏製造してどうちんかうとて頗る名高し。

たうちゅう

道中(名) 旅行中。

たうちゅうき

道中記(名) 〔一〕紀行。●道の記。〔二〕旅中の宿泊、見物所、参拜所などの案内をなしたる書。

たうり

道理(名) こさわり。●すぢみち。

どうりん

登臨(名) 〔一〕上より下に臨むこと。〔二〕上より下をながむること。

どうりりう

逗留(名) 一處にさゝまること。

たうりう

當流(名) 我流儀。

どうり

棟梁(名) 〔一〕家屋の棟を梁と。〔二〕重臣。○棟木は家作の大切な材ゆゑ之に比して國家の重臣を云ふ。〔三〕大工の頭。

どうれりう

同僚(名) あひやく。●同役。●なかま。

どうるゐ

同類(名) 同じたぐひ。●一味。●仲間。

たうおん

唐音(名) たういんに同じ。

どうおん

同音(名) 〔一〕發音の同じきこと。○「平氏と瓶子とは同音の詞」〔二〕聲の調子の同一なること。○「同音に讀む」〔三〕能樂にて謠を同吟する人。●地謠。●地方。

どうわう

藤黄(名) 繪具の名。雌黄に同じ。

だうわ

道話(名) 心學上の談話。●道德に關する話。

たとうわく

當惑(名)

困却。●難澁。△(動)―當惑す。

どうわすれ

胴忘(名)

不圖忘るゝこと。

どうか

登退(名)

退く登天し給ふの意。◎崩御。

たふツカ

踏歌(名)

古へ禁中にて行はれたる公事の
名。聲よく歌ふ事のすぐれたる男女を召し
て年始の祝言を歌はしめ舞を舞はせたるも
の。男踏歌は正月十四五日。女踏歌は同十
六日にあり。

たとうか

稻荷(名)

狐の異名。

たとうか

堂下(名)

武家を云ふ。……公家を堂上といふ
に對して。

たとうか

道家(名)

老子を祖とする支那の宗教。或は祈
禱を爲し幻術を行ひ死者の靈魂を招き仙界
に出入するといふもの。

たとうか

道歌(名)

心學上の和歌。教訓の意味あるもの。

どうか

〔副〕

「一」どうぞ。●なにさぞ。○「どうか宜し
く願ふ」(二)「どのやうにか。●なんさ。○
「どうなるべし」(俗)

どうがい

燈蓋(名)

油火を燈すに用ふる小さき皿。●

どうがね

油皿。

胴金(名)

刀劔の鞘などの中央にはめたる

たとうからし

環。

唐辛子(名)

草の名。丸く長く先の尖りた
る實のなるもの。熟するに従ひ眞赤になり
て味ひ辛く。常に食物の薬味として用ひら
る。

どうかん

等閑(名)

なほざり。●なげやり。

どうがん

冬瓜(名)

さうがかに同じ。

たふかのせちゑ

踏歌節會(名)

踏歌の行はるゝ日の
公事。

たとうかく

唐樂(名)

雅樂の一種。支那の隋唐より傳來
せしもの。

どうかく

同學(名)

同じ學校同じ師匠なごにて學問す
ること。

どうがめ

胴龜(名)

泥龜どろがめの音便。◎すつぽん。

どうよう

登庸どうよう(名)

引上げて官途に採用するこ
と。○「人材登庸」

どうやう

東洋(名)

亞細亞洲の諸國。

どうえう

童謡(名)

「一」子供の謡ふ流行歌。「二」特に
は昔し國家に起るべき吉凶の前兆を誰謡は
するさなく兒童の道路なごにて謡ひたるも
の。(組)

どうえう

童幼(名) なさなこ。●子供。

どうえう

動搖(名) 「一」うごくこと。●ゆるぐこと。

「二」騒動。●さわぎ。

どうやう

同様(名) 同一。●同狀。●一樣。●同斷。

どうよく

胴慾(名) 「一」胴慾。●多慾。「二」苛酷。●非道。●むごきこと。●なさげなきこと。

どうよし

篠葦(名) 篠の一名。

たうだい

當代(名) 當時。●當世。

どうだい

燈臺(名) 「一」油火または蠟燭を燈す臺。●燭臺。「二」燈明臺。

童體(名) 子供姿。○「童體の翁」

どうたい

燈臺躑躅(名) どうだんつづじに同じ

たうたり

滔たり(形) 水の滔々と流るゝ有様。○謠曲

「絶えずたりたり」

どうたん

登壇(名) 演説などする時壇の上に登る事。

△(動) 登壇す。

どうだん

同斷(名) 同様。●同前。○「右同斷」

どうだん

(名) どうだんつづじの略。

どうだんつづじ

燈臺躑躅(名) どうだいつづじの音便

◎灌木の名。枝葉繁くして春の末。葉の間より白く小さき筒形の花咲き。秋の末をの

どうだう

葉極めて美しく紅葉を爲す。又の名は八入

だうだう

躑躅と云ひ。俗にはどうだんと稱ふ。

どうだう

同道(名) 同行。●みちつれ。●同伴。

だうだう

堂堂(形) 威嚴ある有様。●嚴格なる有様。

たうれい

(又) 堂々。

どうれつ

答禮(名) 返禮。

どうそ

同列(名) 同じくらゐ。●同座。

どうぞ

登祚(名) 天日嗣の位に即き給ふこと。●即位。

(副) なにぞ。●ごうい。●ひたすら。●偏に。

どうそう

同窓(名) 同學。●學友。

だうぞく

盜賊(名) ぬすびと。●賊。

だうぞく

道俗(名) 僧と俗と。

だうそじん

道祖神(名) 道を守る神。●さへの神。

たうつきん

唐頭巾(名) 狂言裝束の一つ。

たうねん

當年(名) そのかみ。●今年。

どうねん

同年(名) 「一」同じ年。「二」同

どうなん

東南(名) ひがしみなみ。●哭。

どうなん

童男(名) 男の子供。●少年。

どうなん

童男(名) 男の子供。●少年。



たとうなん

盜難(名) 盜賊にあひたる災難。●物を盗まれたること。

たとうらい

到來(名) 「一」いたりきたる事。○謡曲「されども時節の到來」「二」食物など贈り來る事。○「此魚到來に任せ御目に懸け申候」

たとうらい

常來(名) 未來。●來世。常來導師(名) 彌勒佛を云ふ。

たとうらいのたとうし

胴亂(名) 方形に作れる革袋の腰下げ。……もこは銃丸の入物なれと後には印・藥など入れて携ふるものとなれり。

どうらん

道樂(名) 物好。●なぐさみ。●遊蕩。道迎(名) 神社に參詣して歸る人を祝ひて酒など持ちて途中まで出で迎ふる事。●酒迎へ。

たどうらく

たどうむかへ

藤庭(名) ともしろに同じ。

どうむしろ

凍雨(名) 氷りたる雨。●冬の雨。●寒雨。

たどうちほり

唐團扇(名) 唐人の持つ形の團扇。(圖)

たどうのほり

答拜(名) 答への拜禮。○源氏「おりて答の拜し給ふ」

ふ



どうのべん

頭辨(名) 藏人頭にて辨官を兼ねたる人の稱。

どうのちゆうじ

頭中將(名) 藏人の頭にて近衛の中將を兼ねたる人の稱。

たどうのや

答矢(名) 返報の矢。●敵に返し射る矢。○盛衰・答の矢を射その敵を討ち捕りて」

たどうぐ

道具(名) 「一」其道々々にて用ふる器械。……武家にては鎗を云ひ樂人は樂器を稱するの類。(二)器具。

どうくらう

藤九郎(名) 鳥の名。●信天翁の異名。燈花(名) ともし火の花。●丁子頭に同じ。

どうぐわ

冬瓜(名) 瓜の一種。白瓜に似て短く皮厚くして薄緑に白の粉をふきたるもの。甌瓜。◎この瓜冬に至りて熟するを最良とす。よりて名づく。

どうぐわ

唐畫(名) 支那風の畫。●文人畫。銅貨(名) 銅にて作りたる貨幣。

たどうぐわ

等外(名) 「一」定級の外。●等級の外。(二)判任官の下位に屬する官吏。

どうぐわ

唐冠(名) 能裝束の一つ。唐人の冠に擬して作りたるもの。

たどうくん

て作りたるもの。

だうぐたて

道具立(名) 道具の準備。●道具の整頓。

どうぐう

東宮。春宮(名) 「一」皇太子の住み給ふ宮の名。●みこのみや。●はるのみや。「二」皇

太子。

どうぐうばう

春宮坊(名) 春宮の事を掌る役所。官吏に太夫、亮、進、屬あり。

どうぐうしよぐ

東宮職(名) どうぐうしきに同じ。今は此稱を用ふ。

どうぐうしき

春宮職(名) 春宮の事を掌る役所。●春宮坊に同じ。

だうぐや

道具屋(名) すべての器物家具など賣買する店。

たうぐもち

道具持(名) 武家にて鎧を持ち供する男。

どうや

同夜(名) 同じ夜。●その夜。

どうやち

(副) どうやち ●何やら。(俗)膏藥。(紫日記)

どうやち

同役(名) 同勤。●相役。●同僚。胴丸(名) 鎧の名。胴に番なくして屈伸の自由に出来るやうに製造したるもの。

どうあめ

胴卷(名) 旅行などの時胴腹に巻つくる金入れの袋。

どうけ

冬夏(名) 佛門にて冬と夏とに安居を稱へて九十日間つゝ禁足して佛法修行する時期を云ふ。●謠曲「此程は奥州に候ひしが都に上り冬夏をも結ばばやと思ひ候」

たうけ

峠(名) たむけの音便。◎山坂の登りつめたる處。……たむけを見よ。

どうけ

同家(名) 同じ家。●同じ家がらの親族。道家(名) どうかに同じ。

だうけ

道戯(名) おどけ。●滑稽。●ふざけ。統計(名) 總合して計算すること。

たうけい

刀圭(名) 「一」醫者の藥を盛る匕。「二」醫術また醫者。

どうけい

團鶏(名) 鶏合。●蹴合ひ。刀圭家(名) 醫者。

たうけい

統計學(名) 統計の方法を研究する學術。

どうけい

統計表(名) 統計を表にあらはしたるもの。

だうける

(自動一段) おどける。●ふざける。●ひよける。

たうけつ

當月(名) この月。

どうけつ

同穴(名)

死にて同じ穴に葬らるること。...

たとうけん

刀劍(名)

男女の深き契にいふ詞。

たとうけん

唐犬(名)

犬の一種。●獵犬として常に用ひらるゝもの。

どうけん

同權(名)

同等の權利。

どうふ

豆腐(名)

大豆を挽き袋にてしばりて作れる食物。白く四角にて水氣を帶び。常に汁の實

物。白く四角にて水氣を帶び。常に汁の實

どうぶ

童舞(名)

童男の演ずる舞樂。●わらはまひ。

たうぶ

(他動四段)

賜ふの音便。(雅)

たうぶ

(他動下二段)

たぶの延音。◎たべる。●食する。

たうぶ

(自動四段)

給ふの音便。(雅)

どうぶるひ

胴震(名)

みぶるひ。

たうぶつ

唐物(名)

舶來品。

どうぶつ

動物(名)

身體の中に機關あり感覺ありて自由

由に動作し移轉し得る生活物。すなはち人類、鳥獸、魚、介、蟲の類。

どうぶつ

銅佛(名)

銅にて作りたる佛像。●かなぶつ。

どうぶつがく

動物學(名)

専ら動物に關係する事を研

究する學科。

どうぶつあん

動物園(名)

諸種の動物を飼ひ置く所。

どうぶん

等分(名)

等しく分量を分つこと。●平等。

たとうぶん

當分(名)(副)

今より暫くの時。

どうふう

東風(名)

ひがしかぜ。●こち。●春の風。

どうふく

同腹(名)

「一」生母を同じうすること。●同母兄弟。「二」同志。●同心。●一時。

たうふく

道服(名)

昔し貴人の寛除のため衣の上に着たる服。直線に似て裾にひだあり。

どうこ

銅壺(名)

銅製の小さき竈。常に湯を沸し又酒

どうこん

の爛なごをするに用ふ。

たうこん

痘痕(名)

疱疹のあと。●あばた。●いも。

たうこん

刀痕(名)

刀にて附きたる疵あと。

どうか

當今(副)

唯今。●今日。●目下。

どうか

同行(名)

同道。●みちづれ。

だうが

道號(名)

入道して附くる名。……清盛の

どうご

淨海。

後成の寂阿の類。

どうご

東國(名)

東方にあたる國。●あづま。●關

東。

たうご

當國(名)

この國。

たうご

唐胡麻(名)

胡麻の一種。實より蓖麻子油の

取らるゝもの。

さうで

(動)

取り出の音便。○「懐なる文をさうで」

(雅)

さうで

(副)

さうせ。何にもせよ。●つまり。

たうてい

到底(副)

つまり。●結局。

たうてい

唐帝(名)

唐朝の天子。

さうてんらく

登天樂(名)

雅樂の曲名。

さうてんく

東天紅(感)

鶏の曉を告ぐる聲。

たうき

當座(名)

「一」その座席。●席上。「二」その席にて直によむ和歌俳諧。●即詠。●即吟。

「三」その場その時だけの間に合はす事。○

「當座の難を凌ぐん」と

さうき

動座(名)

貴人の座所を他へ移すこと。

さうき

動作(名)

舉動。●たちぬふるまい。

さうき

馨沙(名)

明馨水と膠とを交ぜたるものを紙に引きて繪などかく時に墨、彩色のにじみ流るるを防ぐ事。

るるを防ぐ事。

さうき

東西(名)

「一」ひがしにしと。「二」芝居觀せ物の場所などにて東西南北に居る多くの見物人の喧囂を鎮むるに云ふ詞。「三」東や西やと身動きすること。○枕「袖をさらへて

東西なさせず」

篠細工(名)

篠にて作る物品。

さうき

洞察(名)

手紙の詞。●見さほすこと。●み

さうき

ぬくこと。●よく／＼推察すること。

さうき

動産(名)

運搬する事を得る家財道具。

さうき

銅山(名)

銅を出す山。

さうき

幘鼻褌(名)

男の腰巻。猿股引の類。

さうき

冬季(名)

冬の時侯。●冬。

さうき

騰貴(名)

物價の上ること。

さうき

投機(名)

時機に投ずること。●やましこと。

さうき

○「投機商」

さうき

登記(名)

公の帳簿に書き上ること。

さうき

陶器(名)

土に藥品を掛けて焼きたる器物。●

さうき

やきもの。

●すゑもの。●せこもの。

さうき

動氣(名)

血液の循環烈しくなりて心臓の動くこと。●胸騒ぎのすること。

さうき

同義(名)

同じ意味。●同じ趣意。

さうき

胴着(名)

上着と襦袢との間に着る衣。短くして綿を入れたるもの。

さうき

動議(名)

衆論に對して反對もしくは新案の意見。●異議。

さうき

見。

●異議。

た^トうぎり

唐桐(名) 桐の一種。赤き花の咲くもの。
胸切(名) 胸中より二つに切ること。●つぎり。

どうきよ

同居(名) ひさつ家に相住むこと。

どうきやう

童形(名) また元服せざる貴族の少年。
○平家「經政は幼少の時より仁和寺の御室の御所に童形にて候はれしかば」

同郷(名) 同じ郷里。

どうきやう

同行(名) 同道。●同伴。●みちづれ。

どうきやう

登極(名) 即位。●登祚。

どうきやう

當局(名) 其事の責任者と爲る事。

た^トうきん

當今(名) 當代の今上。●今上陛下。○謡曲「そもく是は當今に仕へ奉る臣下なり」

どうきん

同衾(名) 二人同じ床に寝る事。●ともれ。

どうきん

同勤(名) 同役。●同僚。●同職。

どうきん

同吟(名) 〔一〕同音に詩歌を吟すること。〔二〕特には能樂の地謡。

どうきん

等級(名) 段階。●階級。●格。

どうきん

桐油(名) 〔一〕山桐より取りたる油。〔二〕その油を引きたる紙。●桐油紙。〔三〕その紙にて拵へたる雨合羽。●桐油合羽。

どうきん

桐油(名) 〔一〕山桐より取りたる油。〔二〕その油を引きたる紙。●桐油紙。〔三〕その紙にて拵へたる雨合羽。●桐油合羽。

どうきん

桐油(名) 〔一〕山桐より取りたる油。〔二〕その油を引きたる紙。●桐油紙。〔三〕その紙にて拵へたる雨合羽。●桐油合羽。

どうきん

桐油(名) 〔一〕山桐より取りたる油。〔二〕その油を引きたる紙。●桐油紙。〔三〕その紙にて拵へたる雨合羽。●桐油合羽。

どうきん

桐油(名) 〔一〕山桐より取りたる油。〔二〕その油を引きたる紙。●桐油紙。〔三〕その紙にて拵へたる雨合羽。●桐油合羽。

どうゆがっぱ

桐油合羽(名) 桐油紙にて拵へたる雨合羽。

どうゆがみ

桐油紙(名) 桐油を引きたる紙。

た^トうめ

専女(名) 〔一〕老女。●姫。〔二〕狐の異名。

どうめ

〔副〕 もつぱら。〔古〕

どうめい

透明(名) 明かに透きとほること。

どうめい

同盟(名) 共に盟ふこと。●盟を結びたる仲間。

どうみやう

燈明(名) 神佛に供ふる燈火。●みあかし。●おあかり。

どうみやう

燈明(名) 神佛に供ふる燈火。●みあかし。●おあかり。

どうみやう

燈明(名) 神佛に供ふる燈火。●みあかし。●おあかり。

どうみやう

燈明(名) 神佛に供ふる燈火。●みあかし。●おあかり。

どうみやう

燈明(名) 神佛に供ふる燈火。●みあかし。●おあかり。

どうみやう

燈明(名) 神佛に供ふる燈火。●みあかし。●おあかり。

どうみやう

燈明(名) 神佛に供ふる燈火。●みあかし。●おあかり。

どうみやう

燈明(名) 神佛に供ふる燈火。●みあかし。●おあかり。

どうみやう

燈明(名) 神佛に供ふる燈火。●みあかし。●おあかり。

どうみやう

燈明(名) 神佛に供ふる燈火。●みあかし。●おあかり。

どうみやう

燈明(名) 神佛に供ふる燈火。●みあかし。●おあかり。

どうみやう

燈明(名) 神佛に供ふる燈火。●みあかし。●おあかり。

どうみやう

燈明(名) 神佛に供ふる燈火。●みあかし。●おあかり。

どうみやう

燈明(名) 神佛に供ふる燈火。●みあかし。●おあかり。

どうみやう

燈明(名) 神佛に供ふる燈火。●みあかし。●おあかり。

長き時節の名。冬の氣候その極に達し。此日より春の陽氣に復るさいふ今は大概十二月二十二日前後にあり。

刀自(名) さじの延音。

(名) 「一」酒壺の名。○「大さうじ」「小さうじ」

「二」轉じて酒を作る人。●酒屋の主人。

當寺(名) 此寺。●我寺。

當時(名) その時。●その昔。●そのいみ。●

現今。

同土(名) じしごちに同じ。

同志(名) 同じ志の人。●つれ。●なま。

動詞(名) 文法上の詞。事物の動靜を顯すもの。

●用言。●わざこは。

瞳子(名) ひさみ。●くろめ。

道士(名) 道家の僧。

道師(名) 人を佛道に導き教化する僧。●説法

師。●葬式にて引導を渡す僧。●又は其式

を執行する主位の僧。

童子(名) 「一」兒童。●子供。●わらは。「二」

能面の名。美少年の顔に作りたるもの。

冬至梅(名) さうじうめに同じ。

さうじうめ

どうしよ 投書(名) 文章詩歌を新聞紙などに寄送するこ

さ。●寄書。●なげぶみ。●よせぶみ。

答書(名) 返書。

當處(名) 此處。●當地。

どうしや 堂上(名) 殿上人。●公卿。

どうせ 洞簫(名) 竈に吹く笛の一種。尺八の類。

どうじつ 桃實(名) もいの實。(謠曲)

たどうじつ 當日(名) 其日。

どうしん 燈心(名) さうしみに同じ。

どうしん 投身(名) みなげ。●入水。

たどうじん 唐人(名) 昔の支那人。

どうしん 同心(名) 「一」同じ心。●同意。「二」徳川時

代の役名。足輕。

だどうしん 道心(名) 佛道に歸依する人。

どうしんざさ 燈心草(名) 燈心を取草。細蘭。●蘭

草。

さうじうめ 冬至梅(名) 早く冬至の頃に咲く梅の一

種。●早梅。●寒梅。

どうしや 騰寫(名) 書寫。●寫字。

どうしや 同車(名) 相乗の車。●同乗。

どうしや 礮砂(名) 藥品の名。鹽に似たる白きもの。水

素、窒素、鹽素の化合より成る。

だうじや

道者(名) 順禮。

だうしやせい

礧砂精(名) 礧砂の鹽素だけを抜きたるもの。

だうじがうし

童子格子(名) 太き子持筋の格子縞。繪にかく酒吞童子の着たる縞柄に似たる故にいふ。

たうじき

當色(名) 「一」位袍。位階に相當の色を用ふる故にいふ。「二」昔し禁中にて公事を行はるゝ時其役を勤むる者に朝廷より配當して賜はる裝束。

だうしゆく

投宿(名) 旅にて宿を取るこゝ。

だうじゆく

同宿(名) 「一」あひやど。●ひまつ家に宿るこゝ。「二」ひまつ寺に寓する僧。

だうじゆし

東豎子(名) 古代女官の名。あづまわらは。●ひまつ。

だうじめ

胴締(名) 胴を締むる紐。又は革帶の類。

だうしめ

燈心(名) 油火の中に入れて火を燈すもの。蘭の中より出づる白き心を主とす。

たうじせん

冬至線(名) 冬至の時に太陽の至るさいふ想像線。●回歸線。

だうひ

橙皮(名)

乾したる橙だいの皮。藥用にするもの。

たうひぞ

唐人(名)

唐朝の人。

だうへいほう

投票(名)

いれふだ。●入札にようさつ。

だうひつ

投錨(名)

錨を下すこゝ。●碇泊。

だうびん

同筆(名)

同じ筆者の書きたるもの。

だうひゆ

(名) 蛸たこの異名。

だうも

橙皮油(名)

橙皮より造りたる油。

だうもり

堂守(名)

寺の番人。

だうもん

同門(名)

同じ師匠を戴く人。●相弟子。●同流。●同學。

だうもう

童蒙(名)

智識のまだくちき童兒。

だうせ

(副) どうで。

●何れにしても。●つまり。(俗)今世。

たうせい

當世(名)

今世。

だうせい

同姓(名)

同じ姓。●同じ苗字。

だうせい

動靜(名)

動くも動かぬも。●舉動。●様子。

だうせい

同勢(名)

一群の人数。●同行の人々。○「同勢三百騎」

たうせつ

當節(名)

當世。當時。

たうせん

唐船(名)

支那の船。●支那形の船。

たうせん

當籤(名)

くじあたり。

どうぜん

東漸(名) 東方の地へ漸次に進み入る事。○

「佛法東漸」「文明東漸」

たうぜん

當然(名) あたりまへ。

どうせん

同船(名) 乗合船。●乗合人。

どうせき

同席(名) 席を同じくすること。●坐を同じくすること。●同じすわりば。

どうす

東司(名) 廁かばいのこと。○廁の神に登司どうすといへるありとの傳説に起り多く寺にていふ詞。

どうす

投(他動サ變) 投ぐ。●投げ込む。○「身を投す」

●「金錢を投す」

どうす

投(自動サ變) 乗る。●入る。●つけ入る。○

「窮鳥懷に投す」●「時變に投す」

たうす

討(他動サ變) 討つ。●征伐する。

どうす

動(自動サ變) 「一」感動す。●刺撃せらるゝ。

「二」胸騒ぎきする。●動氣の打つ。

どうす

同す(自動サ變) 與する。●同意する。

どの

殿(名) 「一」大きな建物。●貴人の家。「二」貴人。(男性)「三」特に攝政關白なる人。「四」武家にては大名。すなはち主人。「四」女より男子を呼ぶ詞。

どの

殿(代) 貴人(男性)の代名詞。

どの

殿(名) 人の姓名の下に置く敬語。●書簡文にては目上の人の時之を階書に書き。目下の人

どの

(代) 疑問の代名詞。●何れの。●何の。

どの

宿直(名) 殿居の意。●禁中または主人の殿中に泊り番をする事。●しゆくちよく。

どの

宿直所(名) 宿直室。●夜の御番所。○源氏「御さのおごころも例よりはのごや、なる心地するに」

どの

宿直装束(名) このぬきぬ出立でたちの服裝。

どの

(名) 宿直の疲勞。(新六帖)

どの

宿直衣(名) 古代公卿の宿直の時に著る制服。●衣冠または直衣。

どの

宿直人(名) 宿泊する人。●泊り番の人。

どの

宿直申(名) 古へ禁中に宿する侍臣の夜亥の刻に姓名を調査せられて各自之を名のるの式。又名對面さかも名謁てつとも云ふ。

どの

宿直物(名) 禁中宿直の時に着る衣服または夜具の類。

このぬきのふくろ

宿直物の袋(名) このぬきのを入るい袋。

どのぬすがた

宿直姿(名) このぬさうぐくの形姿。なりすがた

どのばら

殿原(名) 殿たち。●男子の人々。

どのがた

殿方(名) 女より男を呼ぶ敬語。●殿の方々。

どのつくり

殿造(名) 貴人の家の建築。○古今「此殿はうへも富みけりさき草の三つば四つばに殿つくりせり」

どのつり

殿移(名) 「一」殿の移轉。「二」古代の物語の名。但し世に傳はらず。(枕)

どのぐも

(自動四段) 雲の空一面に棚引わたる。●曇る。○萬葉「此見ゆる天の白雲。わたつみの沖つ宮邊に。立ちわたりこのぐもりあひて。雨も給はれ」

このい

殿御(名) 女より男を呼ぶ敬語。●多くは夫または情郎に用ふ。

このい

殿籠(自動四段) 殿に籠るの意。◎寝るの敬語。●御寝なる。○空穂「夜はこなたにこのこもれ」

このい

外重。外衛(名) 禁裡の門外を守るの意にて。◎左衛門右衛門の府を云ふ。○新六帖「御垣守さのへに立てる棟陰下踏みなれし道ぞ忘れぬ」

このさま

殿様(名) 大名。●主君。

このびど

殿人(名) 其大名の家來。○「薩摩の殿人」

このも

主殿(名) このもれうの略。

このもり

主殿(名) このもれうの略。

このもれ

主殿寮(名) 殿を守る役所の意。◎古へ宮内省に屬して供御、輦輿、禁中の洒掃、燈燭、庭燎、等の事を掌る役所。●官吏には頭、助、允、屬あり。又女孺六人々に屬す。

このもりのにくん

主殿の女官(名) 主殿寮の女孺禁中の掃除なごする役。○枕「このもりの女官御清め参りばて」

このもりののみやつこ

(名) 主殿寮に奉仕する伴氏の御奴。禁中の掃除なごする役。○朗詠集「このもりのこののみやつこよそにして掃はぬ庭に花ぞ散り敷く」

このもりのしかや

主殿寮(名) このもれう。

このもつかや

主殿寮(名) このもれう。

このも

徳(名) 「一」善良なる心のはたらき。●道德。●名望。●威徳。●恩恵。「二」功能。●好結果。○「三」福。●富。

この

得(名) 利益。●まうけ。

さく 疾(副) はやく。●すみやかに。●以前に。

さく 説(他動四段) 説明する。●言ひ述ぶる。

さく 解(他動四段) 「一」ほぐく。●放す。「二」固體を流動物體とする。●溶解する。●さかす。

さく 解(自動下二段) 「一」ほぐくる。●離る。●「二」固體の物の流動體となる。●溶解する。●さろける。

さく 研。磨(他動四段) 摩りて役に立たせる。●みがく。○「鏡をさく」「刀をさく」「米をさく」

さく 遂(他動下二段) 成功する。●果す。●しおほせる。

さく 毒(名) 「一」飲食して身體を損するもの。●毒藥。「二」又社會個人の害となるもの。

さく 得意(名) 「一」満足。「二」惡意。「三」長所。●得手。●「四」受領の客。商賣云ふ詞。

さく 竹(名) 竹のそがれたる先。○盛衰「二人は竹の林に走り入りて竹のさぐびに貫ぬかれて失せにけり」

さく 徳育(名) 道德の教育。

さく 蛇などの其身を卷きてわだかまること。

さく 罽毘(名) されかうべ。

さくは 特派(名) 特別の派遣。

さくに 特(副) 特別に。●殊更に。●格段に。

さくに 疾(副) 既に。●早く。

さくど 得度(名) 佛道に入ること。●出家する事。

さくにち 徳日(名) 層にて衰日を思ひて呼びかへたる名。……人の生れ性によりて昔し祝ひたる日。

さくにん 徳人(名) 有徳の人。●富裕。

さくぼくけ 獨木橋(名) 丸木橋。

さくべつ 特別(名) 格別。●別段。

さくたう 得道(名) 佛道を悟り得ること。

さくち 疾疾(副) はやくはやく。●すぐに。

さくち 毒毒(形) 形狀言シク活) 毒のありそうな。●さくらし。●いやらし。

さくち 戸口(名) 門戸の出入口。

さくち 徳利(名) 酒の類を入れる陶器。瓶形にて口の狭きもの。

さくち 獨力(名) 一人の力。●一手の業。

さくち 獨立(名) 人にたよらぬこと。●ひさりだち。

さくち 外郭(名) 城外の外圍。

なほあしかにむかふるつかひ（ゆしに同じ。顯輔集） 勘解由使（名）かけ

なみち 都會（名） 大なる市街。●みやこ。●首府。●都邑。

なごわく 度外（名） 法度の外。●制限の外。●普通の外。
△（形）—度外。（副）—度外に。

なごはこれ 德是（名） 則詠の曲名。

なごがい 毒害（名） 毒藥にて人を殺害すること。△（動）—毒害す。

なごがく 篤學（名） 「一」學問に志篤きこと。「二」碩學。獨學（名） 師なくして學ぶこと。●ひこりまなび。△（動）—獨學す。

なごよう 德用（名） 利益のある用法。●利方。りかた

なごたい 特待（名） 特別の待遇。

なごたつ 得脱（名） 佛法の功力によりて苦患を脱するを得ること。○謡曲「成佛得脱をうるぞうれしき」

なごだん 獨斷（名） 一人の意見にて決斷すること。●ひとりぎめ。

なごたく 德澤（名） 恩徳の餘澤。●めぐみ。

なごそう 德宗（名） 鎌倉幕府の時代北條氏總領の知行

所の稱。

なごさう 毒草（名） 毒のある草。

なごら 塘（名） 鳥座の意。◎鳥の寝る所。●ねぐら。

なごらく 獨樂（名） 獨り楽しむこと。

なごむし 毒蟲（名） 毒ある蟲。

なごうつぎ 毒空木（名） うつぎに似たる灌木にて山野

または河原なさに叢生し。夏の頃鮮紅色の花咲くもの。河原うつぎ鬼うつぎともいひて花に毒分を含めるもの。

なごく 德化（名） 威望恩徳の感化。●德音薰陶の結果。

果。

なごや 毒矢（名） 矢の根に毒を塗りつけたる矢。

なごやく 毒藥（名） 毒の藥。●鴆毒。

なごけん 特權（名） 特別に得る權利。

なごけし 毒消（名） 毒を消す藥。●消毒藥。●解毒劑。

なごふ 毒婦（名） 惡婦。

なごぶん 得分（名） まうけ。●利分。

なごぶん 毒分（名） 毒の分子。●毒氣。

なごこ 獨鈷（名） 「一」佛具の名。兩端に



尖ある杵の如きもの。もこは天然の兵器より起りて邪を摧

き疑た斷つて僧の之を用ふる事となれるもの。(圖)

くわん

獨鉗(名)

こくへいに同じ。

くわんか

德行(名)

道德の行爲。

くわんふし

得業生(名)

さくげふせいとは同じ。

くわんてん

特典(名)

特別の恩典。●特旨。

くわん

木賊(名)

砥草の意。◎「一」草の名。筒の如く

小さき莖真直にのびて一寸位づゝに節あり。之にて物を磨けば砥の如き作用をなす。
「一」さくさいろの略。

くわん

獨裁(名)

帝王獨斷にて万機を裁決すること。

くわん

木賊色(名)

染色の名。黒みを帯びたる綠。又海松色とも云ふ。

くわん

毒殺(名)

毒害に同じ。△(動)―毒殺す。

くわん

得策(名)

爲して利ある策。

くわん

木賊葺(名)

家屋の屋根の一種の葺き方。

二分の板にて葺きたるもの。

くわん

德義(名)

道德上の大義務。

くわん

毒氣(名)

毒になる氣。

くわん

特許(名)

特別に與ふる免許。

くわん

獨居(名)

獨り居ること。●ひさりすまひ。

くわん

獨居(名)

古へ大學寮を卒業せし

くわん

獨吟(名)

「一」詩歌を一人にて吟すること。

「二」謠曲を一人にて謠ふ一種の方法。「三」特に獨吟にて謠ふべく出來たる謠曲の文句。○「獨吟集」……△(動)―獨吟す。

くわん

鳥塗矢(名)

鳥の羽莖に附子さいふ毒を塗

りて作れる矢。蝦夷の蠻民は之を以て敵の鎧の透間をれらひ射るこ云ふ。○顯輔集「あ

さましや千島のねぞのつくるなるさぐきの矢こそひまはもるなれ」

くわん

特命(名)

特別の命令。

くわん

匿名(名)

本名を匿して變名を用ふる事。●

くわん

毒見(名)

人に飲食せしむる時已れ先づ毒の有

無を嘗め試むること。

くわん

特旨(名)

天皇特別の思召。

くわん

篇志(名)

あつきこゝろさし。●厚意。

くわん

讀書(名)

書籍を読むこと。△(動)―讀書す。

くわん

特色(名)

特別に得たる點。●得意の處。●

得手。

どくしよく

得色(名) 得意の顔色。

どくしつ

得失(名) 利害。●よしあし。

どくじつ

篤實(名) 心切にてまめやかなること。

どくしん

得心(名) 承知。●合點。

どくしん

獨身(名) ひざりみ。●ひざりもの。

どくじん

土公神(名) 陰陽家にて稱する地の神。……

春は竜に。夏は門に。秋は井に。冬は庭にありて其時節には此神の居場處を動かすを忌むものとす。

どくじや

毒蛇(名) 毒夜を含む蛇。

どくしやく

獨酌(名) 手酌にて酒を飲むこと。△(動)――獨酌す。

どくじや

讀誦(名) 經などを讀み唱ふること。……おもに經文に云ふ。△(動)――讀誦す。

どくひり

特筆(名) 特別に記しつくること。

どくひり

禿筆(名) 穂先のすりきれたる筆。●坊主筆。

どくひり

●ふるふで。●ちびふで。

どくひり

特筆大書(句) 歴史上の大事件など特筆を以て大きく記し附くる事。

どくびん

擯鼻褌(名) 「一」猿股引の類。たふさきに

どくせい

同じ。〔一〕ふんごし。

德政(名) 「一」仁徳を下に施す政治。〔二〕貢

債免除の一法。○貞丈雜記に曰く。德政と云ふは。唐土にては仁政をいふなり。仁政

とは天下の諸人をあはれみ恵む政事をいふなり。日本にても上古は右の如し。鎌倉將

軍の時代にも德政といふは右の通りなり。

東鑑の中所々に德政といふ事あるを見て考ふべし。京都將軍の時代に至り義政公の頃

よりか德政といふは人の金銀米穀諸道具等を借り置きたるを返さず我物にする事を免

さいるをいふなり。それより以後近代に至るまでも借り置きたる物をかへさぬ様に仰

せ付けらるゝを德政といふなり。いにしへ

と後世と德政の行ひ様大に相違なり」

得選子(名) 「一」さくせんと同じ。〔二〕神

樂歌の曲名。

御膳子所の女官の名。供御の御臺

など取扱ふもの。◎采女の中より選舉を得て爲るもの意。

鳥屋(名) 「一」鳥を飼ひ置く所。〔二〕特に鷹の

三九七

住み所。

〔副〕 人などの群集し騒ぐ有様。●どかどか。

とやかく (副) 彼れ此れ。●兎に角。●いろいろ。

とやがへり (名) とやがへる事。

とやがへる (自動四段) 鳥屋にて鷹の毛の抜けかはる。○夫木「とやがへる鷹を手にする粟津野の鶉狩らんと此日くらいつ」

とやだし (鳥屋出(名)) 鷹を鳥屋より出だす事。○夫木「暮れぬとも初とやだしのぼし鷹を一よりいかに合はせざるべき」

とやま (外山(名)) 門山の意にて。○入口の山。……奥山に對して云ふ。

とやか「うやむ (副) とやかくやむ。(源)

とやぶり (名) 鷹の鳥屋に籠る事。○續古今「みちのくのしのぶの鷹のさやこもり」

とやで (鳥屋出(名)) 鷹の鳥屋より出づる事。○夫木「いかにせんさやての鷹のあふ事も稀なる戀にかいりそめてば」

とやあ (土焼(名)) 土焼に同じ。

とや (苦(名)) 菅、茅などにて編みたる筵の類 船また

は漁家の屋根などの覆とするもの。

とま (土間(名)) 建物の中にて床なく地上のみの處。

とまどひ (戸惑(名)) 夜中起き出で寝ぼけて方角を取違へまいつく事。

とまり (止。留(名)) 「一」止まる事。●留まる事。「二」物の最終。○結末。

とまり (泊(名)) 「一」船の留る所。●碇泊所。●津。●港。「二」泊る事。●宿る事。●宿泊。「三」宿屋。

とまりばん (泊番(名)) 泊りて番する事。●宿直。●當直。

とまりやど (泊宿(名)) 旅人の一夜もしくは數日間宿泊する宿屋。……下宿屋などに對して云ふ。

とまりやま (泊山(名)) 鷹狩に日を暮して其夜一泊する山。(西園寺麿百首)

とまりぶね (泊船(名)) 湊に泊り居る船。●繋り船。

とまりぎ (留木(名)) 鳥をさまたする爲めの木。鳥籠などの中に渡し置くもの。

とまる (止。留(自動四段)) 終る。●果つる。●さゝまる。●やむ。●残る。●生きのこる。●立ちどまる。

とまる

泊(自動四段) 「一」船の港にさどまる。繋り居

とまれかくまれ

る。「二」旅宿に宿る。「三」我家の外に宿る。
(副) ともあれ角もあれの約。◎とも
角も何れにしても。

とまれかくまれ

(副) ともれかくまれに同じ。
塗抹(名) 塗り消す事。●抹殺。△(動)―塗抹
す。

とまんちゅう

土饅頭(名) 土を丸く盛り上げたる墓。

とまのや

苦屋(名) 苦屋に同じ。○夫木「苦の屋に波
立ちよらぬけしきにて海士が住みうき程は
見ぬにき」

とまや

苦屋(名) 苦にて屋根を葺きたる家。……おも
に漁家を云ふ。○「海士の苦屋」磯の苦屋」

とまやかた

苦屋形(名) 苦を葺きたる屋根。○月詣集
「玉津島磯の浦屋の苦やかた夢だに見ぬぬ
波の音かな」

とまびやち

苦庇(名) 苦屋の庇。○夫木「かりそめの
をはたの里のさまびさしとさまらぬ袖の露を
見せばや」

とます

斗櫛(名) 一斗櫛。

とげ

刺(名) 草木の莖、葉などに生ずる針の如きもの。

とけい

●竹木などのそげ。●魚の骨などの折れ。
時計(名) 時を計る器。……柱時計。秋時計の
類。

とけい

徒刑(名) 「一」徒刑。〔二〕懲役。

とけつ

兎缺(名) 上唇の中の缺けたること。●三つ口。
●いぐち。

とけつ

吐血(名) 血を吐くこと。●咯血。

とげなし

(形) 形状言ク活) 利き心の無き。○竹取「さ
げなきものをばあへなしさはいひける」

とげん

杜鵑(名) ほこいぎす。

とげんく

杜鵑花(名) さつきつゝい。◎杜鵑の鳴く時
節に咲く故いふ。

とげあふ

解合(自動四段) 互に心の打解くる。●和
睦する。

とげさ

土下座(名) 地上に拜伏して禮する事。徳川時
代に臣民の君主などに對する時の禮。

とふ

都府(名) 「一」みやこ。●首府。〔二〕國司の廳。
●國府。

とぶ

飛(自動四段) 羽を働かして空を行く。●空に翻
る。●身を軽く虚空に上げ又地に落す。

とぶ

潤(名) 泥水。●溝。

さぶろう

都府樓(名) 國府の廳の高樓。

さぶろく

澗醪(名) 糟の交りたる酒。●にこりさけ。

●もろみ。

さぶりの

飛鳥の(名) あすか(大和の地名)の枕詞。

あすかといふ鳥の名あれば言ひ掛けたり。

……後世飛鳥と書きてあすかと讀むは此枕

詞より起る。○萬葉「さぶりのあすかの

里な」

さぶらひ

巾(名) さむらひに同じ。

さぶらふ

巾(他動四段) さむらふに同じ。

さぶのつかのみ

・(名) 編み目の縦に十筋あるつかのみ。(散木)

さぶのすがしち

十符菅薦(名) 編み目の縦に十筋ある

菅薦。古へ陸奥但馬などより産出せり。

さぶて

戸袋(名) 兩戸を開きたる時入れ置く處。

さぶてんま

飛車(名) 自然に空中を飛び得る車。天人

・などの乗るさいふ想像物。(竹取)

さぶね

鳥總(名) 「一」木を伐る斧。○萬葉「さぶさ立

て足柄山に船木伐り」「二」木の梢。○輔親

集「我思ふ花の都のさぶささへ君も下枝の

しづ心なし」「三」木を伐る木屑の飛び散る

さぶひ

飛火。烽火(名) 古へ國家に事變ある時これを報

ぜしむるため朝廷より設け置かれたる合

圖。高き壇を築きて晝は煙を上げ夜は火を

飛ばすやうに仕掛けたるもの。……大和の

春日野は上古之を設け置かれたる處にて飛

火野の名あり。○風雅「古への野守の鏡あ

きたててさぶひは夜半の螢なりけり」

さこ

床(名) すべて物の下敷となるさこ。●寐床。

●疊の心。●車の臺。「二」床の間。「三」床

屋。「四」川の底。

さこ

處。所(名) さこ。●場所。○「硯のおき」

さこ

獨結(名) さこ、の略。

さこ

常(形) 常に變ることなき。●永久の。●不朽の。

さこ

何處(代) 疑問代名詞。●いづこ。●この場所。

さこ

(俗)

さこ

常井(名) 常に湧く水の絶ぬ井。(夫木)

さくはり

常磐(名) 常しへに變らぬ磐。……常に變す

まじきものゝ喩に用ふ。●さきはに同じ。

ところ

野老(名) 蔓草の名。山の芋に似て根に鬚多し。

ところ

處。所(名) 「一」場所。●居所 ●位置。○「物

ところ

おのゝ處を待たり」「二」其土地。○「さゝ

ところ

るの習慣」「三」役所の名。……藏人所、大

ところ

歌所、侍所、繪所の類。「四」點。●箇所。

ところ

○「取るべき所多し」「五」貴人を指して數ふ

ところ

る詞。○「公達一さゝろ」

ところ

處(接) 手紙の詞。然るにの意。○「御出被下候

ところ

處生憎不在にて失禮仕候」

ところ

處拂(名) 徳川時代刑罪の名。住所を追

ところ

拂はるゝ事。●追放。

ところ

處處(名)(副) あちこち。●あちらこち

ところ

ら。●ほうど。

ところ

所置(他動四段) 場所を置く。●一步を讓

ところ

る。○大鏡「この世には我に所おき給ふべ

ところ

し」

ところ

(副) 場所によりて。●其場所故に。●場

ところ

所相應に。○源氏「所からあはれなり」又

ところ

—さゝろからに。△(形)—さゝろからなる。

ところ

○謡曲「中々空は住吉の。所がらなる月を

も見」

ところ

所替(名) 轉居。●轉地。●領地替。

ところ

所書(名) 住所の書附。

ところ

所違(名) かぢちがひ。○信明集「うき

ところ

事も聞はぬものを浮島はさころたがへの名

ところ

にこそありけれ」

ところ

野老(蔓)(名) づらは蔓の通音。●野老に同

ところ

じ。(記)

ところ

所無(形。形狀言ク活) 透間なし。●立錫の

ところ

地なし。○宇治「門に所なく入り滿ちたり」

ところ

所得(自動下二段) 十分心のまゝになる。●

ところ

時にあふ。●ほゝをきかす。○宇治「其所

ところ

に年頃になりて給仕したるものの中には所

ところ

得たる五位ありけり」

ところ

所衆(名) 藏人所の衆の略。○藏人所の

ところ

屬官。六位の侍より推選せられて雜務を掌

ところ

るもの。略してたゞ衆さといふ。

ところ

所得顔に(副) 所得たるさまに。●心

ところ

のまゝに。○源氏「軒の忍ぶが所得顔に青

ところ

みわたれる」△(形)—所得顔なる。

ところ

心太(名) 心太草を煮て製したる食物。夏

ところ

暑き頃醬油なごかけて食ふもの。

ところてんぐさ

心太草(名) 海草の名。其色赤、黄、紫、

白など種々あり製して食用とす。●古名は

心ぶさ。●凝藻葉。

ところわらはし

(名) 婚禮の披露。(紫花)

ところば

所澤砥(名) 上州所澤より産する砥石。

ところまね

所去(自動四段) 場所を避けて人に譲る。

ところせし

所狭(形。形状言ク活) 「一」あたり近處も狭

ところせし

き程にの意。○源氏「小さき屋ごも作り集

めて奉り給へるを所せきまで遊びひるげ給

へり」(二)窮屈、氣の詰る、鬱陶しき、あつ

かひにくき、身の振廻しに、こまる、大そうな

る、面倒なる等の意。○枕「笙の笛は。云々。

いみじうをかし。所せくもてあつかひにく

いず見ゆる」源氏「雨ふりいで、所せくも

あるに」同「世の中いそ所せう思ひなられ

て」(三)重々し、勢の強き、大そうなる等す

べて貴人の形容に用ふ。○源氏「所せき御

いきほび」所せき御身」

ところば

常花(名) 常に咲きてある花。●散らぬ花。

○萬葉「いかにしてそこばなにもが山櫻世

ところばしら

は春ながら見つゝ過さん」

ところば

床柱(名) 床の間の前の左右にある柱。多

ところば

く丸木などにて作る。

ところば

常(名) 常磐の如く永久なること。(形)ーこ

ところば

こはなる。(副)ーそこはに。

ところば

(名) 四月の異名。

ところば

常少女(名) 永久に若き女。○萬葉「川上

ところば

のゆついはむらに草むさす常にもがもなご

ところば

こをさめにて」

ところば

(副) そこはに同じ。(萬葉)

ところば

常若に(名) 永久に若く。●いつまでも老

ところば

いす。○林葉「いつさなく君によはひをゆ

ところば

づるはの猶そこわかにかゆべらなり」

ところば

床飾(名) 床の間の裝飾品。

ところば

常夜(名) 永く夜に、ある事。(記)

ところば

常世(名) 「一」永久不變の世。○萬葉「我國は

ところば

常世にならむ」(二)神の世界。●仙人の世

ところば

界。(三)遠郷。●外國。……雁の故郷を和

ところば

歌にて常世とよむは此外國のこさなり。

ところば

常世邊(名) 常世の方。(萬葉)

ところば

常世蟲(名) 芋虫。

とこよのながきとり

常世長鳴鳥(名) 鶏の異名。◎

天照大神天の岩戸に籠り給ひて滿天下常夜になりし時。長^{なが}きして功ありしと云ふ傳説によりて名づく。鶏の聲は長く引くものなれば長鳴といふ。

とこよのくに

常世の國(名) とこよを見よ。

とこよもの

常世物(名) 常世産の物。橋を云ふ。……

橋は垂仁天皇の御宇田道間守と云ふ人の常世の國より持來れるものなれば云ふ。

とこひみかど

常津御門(名) 永久不朽なる御門。○萬葉「よそに見し眞弓の岡も君ませばとこひみかどとこのぬするかも」

とこひな

常夏(名) 「一」夏を通して變らぬこと。●夏も始終。○萬葉「立山に降りおける雪のこなつに消ずてわたるは神ながらとぞ」

「二」いつまでも夏の變らぬこと。●永久の夏。○順集「秋深く色うつりゆく野邊ながら猶とこなつに見ゆる撫子」

「三」草の名。撫子の一名。

とこなつかし

(形。形狀言シク活) 常になつかし。○源氏「なでしこのこなつかしき色を見ば」

とこなつき

常夏月(名) 常夏の咲く月の意。◎六月の異名。

とこなめ

常滑(名) 常に滑かなる事。河底に水苔など附きたるを云ふ。又一説には底滑^{そこなめ}の意とも云ふ。○萬葉「見れごあかね吉野の河の常滑の絶ゆることなく又歸り見む」

とこなめやき

常滑焼(名) 尾州知多郡常滑村より出づる陶器。

とこう

土工(名) 土木の工事。

とこう

土公(名) 土公神に同じ。

とこふ

誼(他勅四段) のろふに同じ。(紀)

とこのま

床間(名) 室内の上座に一段高く作りて懸物なご懸け置くところ。

とこや

床屋(名) 髪結ひ床。

とこやみ

常闇(名) 常の闇夜。●永久の闇夜。

とこぶち

床縁(名) 床柱と床柱の間の下に置く横木。

とこぶし

常節(名) 蛇^{あはび}の一種。

とこころ

利心(名) 銳利なる心。●活潑なる心。(萬葉)

とこま

十聲(名) 十念に同じ。十返の念佛。

とこぢかつき

床盃(名) 婚禮の夜。寢床に入りて夫婦献酬する祝の盃。

ちめづらし

常珍(名) 常に珍しきこと。△(形)―さめづらなる。(副)―さめづらに。……(雅)

さめづらし

(形。形状言シク活) 常に珍らし。○萬葉「難波人葦火たく屋は煤したれごおのが妻こそさめづらしき」

どこみせ

床店(名) 床の間のやうなる小さき店。

どこしぱり

轉(名) 車の床と輪とを縛り附くるもの。(和名抄)

どこしなへに

長(副) 長久に。●永久に。●いつまでも。―さこしへに同じ。△(形)―さこしなへに。(又)―さこしなへなる。

どこしく

常敷(自動四段) 常に降り敷く。○万葉「白雪のさこしく冬は」

どこしなへに

(副) さこしなへに同じ。△(形)―さこしなへに。(又)―さこしなへなる。

どこすれ

床擦(名) 永く病床にありて衰弱したる體の床に擦れて發する痛み。

どて

(後) さとてを重れたる詞。さ言ひてさ思ひてさとしてさ名つけてなどの意。

どて

土手(名) 堤。

どてい

徒弟(名) 「一門人。●門弟。「二」特に職工

どてら

(名) の弟子。衣類の名。綿厚く袖濶く夜着の小さきやうなる着物。寒き時下賤なる人の衣の上に着るもの。

どてん

渡天(名) 天竺に渡る事。○謡曲「入唐渡天の望み」

どても

(副) どうしても。●到底。●所詮。○楠正行「どても世にながらふべくもあらぬ身の假の契をいかで結ばん」

どてもかくても

(副) どうしてもかうしても。●いかにしても。○今昔「世の中はどてもかくても過してん宮も藁屋も果となければ」

どありて

(副) 暫くして。●暫時ありて。○枕「暫しや。なごさ夜を捨てゝ急ぎ給ふ。さありてなごいへぞ」

どあみ

投網(名) 手に持ち水中に投げ入れて魚を捕ふる網。●うちあみ。

どいせ

土座(名) 土の上に座すること。○「土座して禮拜す」

どいせ

徒罪(名) づざい。●徒刑。

どいせ

吐剂(名) 嘔吐を促す藥。●吐き藥。

うさばんし

土佐半紙(名) 土佐より産する半紙。

うさなり

土佐折(名) 烏帽子の一種。

折方によりて此名あり。

〔圖〕

うさか

烏冠(名) さは鳥さか、は冠の古

名。◎鶏などの頭に冠の如く附きたる紅色の肉。



うさかのり

烏冠菜(名) 海草の名。烏冠の形に似て赤、

白、黒、紫等種々の色あり。食用となる。

うさん

土産(名) 「一」其土地の産物。「二」みやげ。

うさん

登山(名) 山に登る事。△(動)―登山す。

うさんか

(副) うさま、うさまよに同じ。(催馬

樂)

うさやち

(名) 混雜。(俗)

うさち

外様(名) 「一」外の方。○源氏「外様」來「二」

外様大名の略。

うさまたくみ

外様大名(名) 徳川時代にて國持

家の支流。又は豊臣家以前より諸侯たりし大名を云ふ稱。即ち將軍家の一門又は譜代ならぬもの。

うさかち

(副) 彼れ此れさ。●様々に。●い

うさけ

土佐家(名) 「一」土佐繪の家元。一條天皇の頃

名人たりし藤原基光を祖とするもの。「二」

土佐家の畫風。

うさげび

鳥叫(名) 鳥の鳴く聲。(雅)

うさぶし

土佐節(名) 土州より産する經節。

うさぶし

土佐節(名) 俗曲の一種。

うさぶし

土佐繪(名) 土佐家の風に畫がきたる繪。●大

うさぶし

土左衛門(名) 溺死人の異名。(俗)

うさぶし

扇(名) 「一」門戸を鎖すこと。「二」門戸を鎖す

に用ふる道具。……錠、掛金、貫の木の類。

「三」門戸。

うさぶし

鎖(他動四段) 戸締をする。●閉づる。●錠を

おろす。

うさ

時(名) 「一」瞬間の經過する間。●時間。●歲月。

●時節。●時期。●時代。●當時。●時運。

●盛時。●時勢。「二」一晝夜を十二時に割

りたる其一つ。……明治五年以前に用ひら

れたるもの。之を現今の時刻、および十二

支の稱に比較配當すれば左の如し。

九つ。	現今の正午十二時。	午刻。
八つ。	同 午後二時。	未刻。
七つ。	同 午後四時。	申刻。
六つ。	同 午後六時。	酉刻。
五つ。	同 午後八時。	戌刻。
四つ。	同 午後十時。	亥刻。
九つ。	同 午後十二時。	子刻。
八つ。	同 午前二時。	丑刻。
七つ。	同 午前四時。	寅刻。
六つ。	同 午前六時。	卯刻。
五つ。	同 午前八時。	辰刻。
四つ。	同 午前十時。	巳刻。

〔三〕一晝夜を二十四に割りたる其一つ。…

上の表に見ゆ。〔四〕文法上にて過去、現在、未來三種のあらはし方を云ふ稱。

なめ

間。鯨波(名) 合戦の時に両陣互に上ぐる叫の聲。

先づ進まんとして勇氣を鼓舞するためのもあり。勝つて歡喜の聲を發するのもあり。又兵を交ふる時の掛聲にするもあり。古は
大將はいくこ音頭を爲せば軍勢之に應じ

とき

鶉(名)

ておうこ叫ぶを法とせり。

つきの轉。◎鳥の名。鶉に似て翼の裏桃

とき

齋(名)

色にて春は灰色なり。
「一」僧の食事。……僧家にては正午の時に食するを定式として齋と稱へ。其他の時に食するは非時と名づけて例外とす。「二」精進。○榮花「いづくにも其まゝに皆おんときにて明暮神佛を念じたてまつりて過ぎ給ふ」

とき

伽(名)

相手。●遊び連れ。

とき

研。磨(名)

とぐ事。●さきたる物。

とき

土器(名)

素焼の器。●かはらけの類。

とき

鶉色(名)

染色の名。鶉の羽色に擬し桃色に灰色を帯びたるもの。

とき

解部(名)

刑部省の屬官。今の檢事の如きもの。

とき

時時(副)

りく。●なりふし。

とき

時(副)

時によりては。●なりふし。

とき

ふし。

●たまに。●ある時は。

とき

(自動下二段)

中絶する。●さだゆる。

とき

土岐折(名)

折鳥帽子の一種。(圖)



ときばり 常磐。常盤(名) といいはの約音。◎永久に變動

する事なき磐石。

ときばり 常葉(名) 四時落葉せず。又色を變ぜざる木の

總稱。……松、櫟などの類。

ときばに 常磐に(副) 常磐の如く永久に。○祝詞「堅

磐にさきばに幸へ奉り」

ときばり 常磐鳥(名) ほこいぎすの異名。

ときばり 常葉草(名) 松の異名。

ときばり 常葉木(名) 常葉の木。

ときかはさず (副) 時刻を移さず。●即刻。○宇治「今

のほど時をばさず持て來」

ときよ 時世(名) 時と世と。●時節。●時代。●時勢。

ときよ 靈魚(名) 出の名。書物衣類など食ふ出。しみ。

ときよ 渡御(名) 貴人又は神輿などの御渡り。

ときよ 度胸(名) 騰昇。●さもたましひ。

ときよ 讀經(名) 佛經を讀むこと。●誦經。

ときよ 研出(名) 蒔繪の一法。金銀の粉を繪の上に

蒔き。その上に漆をかけて。又其上を磨き

て下繪をほんのりさあらはすもの。

ときよ (名) 中絶。●さだね。

ときよ 時鳥(名) 時鳥の文字の直譯。◎ほこいぎ

す。○夫木「ときつとりなくれ雲井に轟き
て星の林や埋れぬらん」

ときよ 時司(名) 時守に同じ。又其役所。(枕)

ときよ 時津風(名) 潮時に吹く風。(歌詞)

ときよ 時津風(枕) 風の吹を續く意にてふけひ

(地名)の枕詞。○萬葉「時つ風ふけひの濱

に」

(自動四段) 関の聲をあぐる。●はいはいお

うの叫を爲す。

(自動四段) 「一」鶏の鳴きて時刻を報ず

る。○堀川「曉の時つくるなり鶏の聲うち

かはし羽れをならべて」(二)船人の潮時を

待つ。

ときよ 時成(自動四段) 物事の出來揃ふ。●祭の行

列などの渡る。○今昔「さる程に時成りて

物(祭の)ごもわたるを」

ときよ 時中(名) 一時間の半分。●半時間。

ときよ 頭巾。兜巾(名) 山伏の額につく

る小さき帽子。布にて丸く作

り十二のひだを取りたるもの。

(圖)



とさん 鍍金(名) ぬつき

とさんいばら (名) 灌木の名。茶藤に同じ。

とさんば (副) 時にばの音便。

とさんのとり 時鳥(名) ときつとりに同じ。○夫木「思はずに時の鳥を來なけれ世をうみはつる湊入江に」

とさんのてうし 時調子(名) 雅樂にて四時に配當せる調子を云ふ。即ち春は平調。夏は黃鐘。秋は平調。冬は盤渉。

とさんのま 時間(副) しばらく。●さんじ。

とさんのけ 時氣(名) 時疫。●流行病。(雅)

とさんのこゑ 閑聲(名) とさの處を見よ。

とさんのあめ 時雨(名) しぐれ。○夫木「神無月いかなる時の雨なればかきくもるより物悲しかる」

とさんのひと 時人(名) 「一」其時代の人。「二」時運にあひ榮ゆる人。●名望家。●寵臣。

とさんのや 研屋(名) 剪、剃刀、庖丁。小刀の類を磨ぐ職業のもの。

とさんのす 説伏(他動サ變) 説きて伏從せしむる。●説破する。

とさのころも 解衣(名) とさぎめに同じ。○夫木「秋風はこゝと吹き來ぬ白妙のわがとさころも縫ふ人はなし」

とさあかし 説明(名) せつめい。●解釋。

とさあかす 説明(他動四段) 説きて意味を明らかにする。●解釋する。

とさあらひころも 解洗衣(名) 解きて洗濯したる衣。

とさあらひきぬ 拾遺「夕されば秋風寒し我妹子がとさあらひころも行きてはやきん」

とさあらひふツツ 解洗衣(名) とさあらひころもに同じ(萬葉)

とさあらふ 解洗(他動四段) 衣を解きて洗濯する。

とさきぬ 時衣(名) 洗濯する爲めに解きたる衣。(萬葉)

とさめく 解衣(枕) 亂るの枕詞。解衣の如く亂るの意。○萬葉「とさめくの思ひみだれて」

とさめかす (他動四段) 時めかしむる。●寵愛する。

とさめく (自動四段) 好運の時節に出合はす。●時に合ふ。●寵愛を受くる。○源氏「すぐれて時めき給ふ更衣ありけり」

ときみかど

時帝(名) 其時代の天皇。

ときし

研師(名) 及物、鏡など研ぐことを業とする人。●ときや。

ときふ

非時(副) 時ならず。●時節はづれに。●時に拘はらず。●常々。○萬葉「三吉野のみみがの嶽に。ときじくそ雪は降りける」

ときじくのかぐのこみ

非時香菓(名) 橘の古名。◎

ときしまれ

(副) ときしもあれに同じ。○月詣集「時しまれいたくなちりを櫻花うきあるじのみ惜しむ今日かは」

ときじみ

(副) ときじくある故に。○萬葉「山越の風をときじみ寐る夜おちす家なる妹をかけて忍びつ」

ときしもあれ

(副) 外に時もあるべきに。●折も折さて。○古今「時しもあれ秋やは人の別るべき有るを見るだに戀しきものを」

ときみじ

齋非時(名) 齋さ非時じ。●僧の食事。

ときもり

時守(名) 昔し禁中にありて漏刻の番をする役の名。●又時刻毎に合圖なとする役の人。

とめ

姥(名) 年老いたる女。●廻。(記)

とめ

留。止(名) 留むる事。●止むる事。●終り。

とめばり

留針(名) 物を留むるための針。●びん。

とめがはり

留川(名) 漁獲禁斷の川。

とめく

認來(地動カ變) 目的を定めて尋ね来る。○神樂歌「榊葉の香をかくはしみさめくれば八十氏人ぞ圓居せりける」

とめく

(自動四段) ぞめく。●ぞよめく。○榮花「次

とめく

耶君太郎君ぞめきておはしまして」

とめく

耶君太郎君ぞめきておはしまして」

とめく

耶君太郎君ぞめきておはしまして」

とめく

耶君太郎君ぞめきておはしまして」

とめく

耶君太郎君ぞめきておはしまして」

とめく

耶君太郎君ぞめきておはしまして」

とめく

耶君太郎君ぞめきておはしまして」

とめく

耶君太郎君ぞめきておはしまして」

とめく

耶君太郎君ぞめきておはしまして」

とめく

耶君太郎君ぞめきておはしまして」

とめく

耶君太郎君ぞめきておはしまして」

とめく

耶君太郎君ぞめきておはしまして」

さみのを

鷗尾(名) 「(一)牛車の後ろにある轂。○蜻蛉

「車舫にすゐてのいしりてさしわたる。云々
いやしからぬ家の子ども。云々。ながえさ
みのの中に入りこみて」「(二)さみのをこ
この署。

さみのをこ

鷗尾琴(名) さびのをこに同じ。○永
久百首「少女子がさみのをこにひれふり
てかへす真袖を忍ばさらめや」

さみくさ

富草(名) 稻の異名。○詞花「うちむれて高
倉山に積むものは新なる世の富草の花」

さみくじ

富園(名) 富の興行に引く園。之を賣りある
きて多人數の金を募集するもの。

さみびど

富人(名) 富みたる人。

とし

年。歳(名) 「(一)地球の太陽を一週する間の時間。
太陽暦の繰方にて三百六十五日を一年とし
四年毎に一日の閏あり。太陰暦にては三百
六十日にて五年目毎に一月の閏二度あり。
「(二)人の年を経たる數。●よはひ。●年齢。
「(三)稻の異名。●又豐年の意。

とし

徒死(名) むだじに。●犬死。

とし

疾(形。形狀言ク活) 早し。

とし

鋭敏(形。形狀言ク活) 又物の切れ味のよき。
するとし。「(二)悟り早き。●かしこし。●
はしこい。

とし

刀自(名) 「(一)年長じたる女の尊稱。○「母さじ」
「おんなさじ」「(二)主婦。妻。○「いへさじ」
「さじの君」「(三)古へ禁中の卑しき女官。天
皇の御膳を持ち運びなする役。但し御前
には出です。○「おもものやごりのさじ」「臺
盤所のさじ」

とし

途次(副) 道を行く序に。

とし

鳥柴(名) 鷹狩に捕りたる鳥を附くる木の枝。
○新續古今「雪の朝さしに雉をつけて」
「(副) 年毎に。○後拾遺「春毎に見れどもあ
ず山櫻年にや花の咲きまさるらん」

とし

歳徳(名) 陰陽家の祭る神の名。此神の居處
は年々變りありて。其居處に當る方角は一
年中の吉事を司るさて年の始め之に向ひ神
棚を設けて祭る事あり。

とし

歳徳棚(名) 年の始に歳徳神を祭る棚。
●恵方棚。
●年毎。●年々。●(又)一年々に。

とし

年毎。●年々。●(又)一年々に。

とし

年毎。●年々。●(又)一年々に。

としなご

年男(名) 武家にて新年の諸儀式または節

分の豆まきなど行ふ役の男。

としわすれ

年忘(名) 年の暮に其年内の勞苦を忘るゝ

爲にきて開く宴會。●忘年會。

としかさ

年嵩(名) 年上に同じ。

としより

年寄(名) 「一」老人。「二」頭立つ人。「三」武

家にては家老に次ぐ重職。

としよる

年寄(自動四段) 年齢の積る。●老ゆる。

としよはひ

年齢(名) んれい。○源氏「としよは

ひに添へて古への事なん戀しかりけるな」

としよつむつき

年世積月(名) 十二月の異名。

としやう

都城(名) 城郭のある都會。●城下。

としやう

登城(名) 武家時代大名藩臣などが城に參上

する事。△(動)―登城す。

とせう

鱸(名) 魚の名。

としく

徒食(名) 坐食。●居喰。△(動)―徒食す。

としだま

年玉(名) 新年の贈り物。

としつみつき

年積月(名) 十二月の異名。

としなか

年中(名) 年の半分。●年の真中。

としなみ

年並(年次(名)) 毎年ある事。●年數。……和

歌などにて多くは波の意にかけて云ふ。○

としん

妬心(名) 妬む心。●嫉妬心。

としん

都人(名) 都の人。

としん

土人(名) 「一」其土地に住む人。「二」其土地に

生れたる人種。

としん

土神(名) 土公神に同じ。

としうち

同士打(名) 身方同士相闘ふ事。●友争ひ。

としうへ

年上(名) 己より年の長ずる事。又その人。

●年長。

としのいち

歳の市(名) 年の暮に開く市。新年必要の

品物を賣るもの。

としのはに

(副) 年毎に。年々に。○萬葉「年のばに

來鳴くもの故時鳥きげしめげく逢はぬ日

多み」△(形)―さしのはの。

としのはに

(副) さしのはにに同じ。(萬葉)

としのを

年の緒(名) 年月の永く續くを云ふ。○古今

「七夕に貸しつる糸のうちはへて年の緒長

く戀ひやわたらん」

としのわたり

年の渡(名) 天の川を云ふ。年に一度彦

星の渡る處故の名。○後撰「玉かづら絶ぬ

としのかみ

ねものから新玉の年のわたりは唯一夜のみ
「み」

年の神(名) 稻を守る神。○好忠集「みあれ引く加茂のみとしろ引き植ゑて今はた年の神を祈らん」

年夜(名) 年越の夜。

としのよ

年内(名) 「一」其年中。●一年中。●年中。

「二」年の末になりて其年の内を云ふ詞。●年内。ねんなし

としのや

年の矢(名) 年月の速に経過するを矢に喩へて云ふ。○謡曲「年の矢の早くも過ぐる光陰」

としのまめ

年の豆(名) 節分にまく豆。

としのゆき

年雪(名) 毎年降り加はる雪。多く白髪のことによせて云ふ。○拾遺「あたらしき春さへ近くなりゆけば降りのみまさる年の雪かな」

としや

吐瀉(名) 病にて吐き下しする事。△(動)「吐瀉す。

としや

土砂(名) 土と砂と。

としま

年増(名) 三四十歳の婦人をいふ。(俗)

としこ

年兒(名) 年々生るゝ兒。

としごひ

祈年(名) としこひのまつりの略。(祝詞式)

としごひのまつり

祈年祭(名) 二月四日禁中にて行はるゝ神事。皇大神宮以下の諸神を祭りて當年の豊作を祈るための祭。●きれんさい。

としどろ

年頃(名) 「一」近年。●年来。●近頃の三四年。「二」其事に適したる年齢。○「年頃の娘」

としのぞろ

年越草(名) 麥の異名。○冬時き夏刈る故の名。

としこし

年越(名) 「一」舊年を送りて新年に入る事を云ふ。●越年。「二」大晦日。または節分の夜をいふ。●年さり。

として

(後) として。●と爲りて。●と有りて。●とひて。●とて。

としき

年木(名) 正月の用意に伐り出す薪。○「年木、る」年木積む(雅)

としき

(名) 屯食に同じ。(空穗)

としきり

年切(名) 年切に同じ。(後撰)

としきれ

年切(名) 菓の或年け實を結び或年は結ばぬを云ふ。

どじきみ

戸闔(名) 戸のしきみ。しきみに同じ。

どじきみ

軾(名) 牛車の前にある下の横木。

どしゆ

徒手(名) かれて。●素手。●空拳。

どしみ

(名) 精進の後に魚を食ふ事。●精進落ち。(雅)

どしした

年下(名) 己より年の少なき事。又其人。●年少。

どしび

年日(名) 生年の干支と同干支の日。

どしひさに

年久に(副) 年久しく。●永の年月に。(雅)

どひ

都鄙(名) 都と田舎と。

どび

鳶(名) 「一」鳥の名。鷲に似て小さく茶褐色なるもの。「二」鳶色の略。

どび

醴醴(名) 灌木の名。薔薇の如き白色一重の花さくもの。●さきんいばら。

どびいろ

鳶色(名) 鳶の羽に似たる色。赤みを帯びたる黒。●茶褐色。

どびいし

飛石(名) 庭またば浅き川瀬などに並べ置き

どびだうく

飛道具(名) 遠くの敵を攻むる武器。弓、鐵炮の類。

どびな

飛魚(名) さびうなに同じ。(和名抄)

どびか

飛交(自動四段) 飛び違ふ。

どへじょう

土俵(名) 「一」土を入れたる俵。「二」土俵場。

どへじょうば

土俵場(名) 土俵にて築きたる相撲する場所。

どびやじょうし

銅拍子(名) 樂器の名。両手に持て打ち鳴らすやうに真鍮にて作りたるもの。鏡鉞に似て少さし。

どびら

屏(名) 開き戸。

どびん

土瓶(名) 湯茶を沸かすに用ふる陶器。

どびうな

飛魚(名) 魚の名。鯉に似て翼の如き鰭を有し。海面をよく飛びあるくもの。我東北の海に多し。

どびのを

鷗尾(名) さみのなに同じ。

どびのをこ

鷗尾琴(名) 禁中大歌所の御物なる和琴の名。頭に鳶の尾の形を作りたるもの。●さみののをこ。(和名抄)

どびのうな

飛魚(名) さびうなに同じ。

どびぐち

鳶口(名) 鳶の嘴に似て尖りたる鐵を長き柄の先に附け。消防夫などの携ふるもの。

どびで

飛出(名) 能面の名。眼の飛び出でたるものにて鬼などに用ふ。

どびひ

飛火(名) 「一」飛び散る火の粉。「二」病の名。

皮膚に出来る水腫の小さきものにて、いかにへ忽にうつる病。

とも

友。朋(名)

「一」親しく交はる人。●朋友。●友人。

とも

供(名)

「二」仲間。●ともがら。●徒。貴人外出の時従ひ行く人。●従者。●供人。

とも

艫(名)

船の後ろの部分。……艫の對。

とも

駟(名)

上古武具の名。弓を射る

時左の臂に着けたるもの。

弓を引けば弦がへりして此

に觸れ音のするやうに革に

て袋の如く作る。(圖)

とも

(後)

推量して動詞の意を反せしむる時の詞。○

とも

吃(名)

「死すとも歸らじ」「風吹くとも行かん」

とも

共(助名)

名詞に添へて複數をあらはす詞。●た

とも

(後)

ち。●等。○「船とも」「子とも」

とも

(後)

確定して動詞の意を反せしむる詞。○「行け

とも

とも行かれず」

待てとも來らず」

とも

艫(名)

船の艫方にある櫓。

とも

共に。與に(副)

彼此同じく。●彼此一つに。●

ともへ

艫船(名)

舟の艫と艫さ。○謡曲「平家の公達

ともへ

伴部(名)

伴造の管する各の一部族。舍人、兵

ともち

(名)

朋友同士。

ともども

共に(副)

相共に。●諸共に。●いっしょに。

ともども

共共(副)

共々にさ。○貫之集「共々さ

ともちどり

友千鳥(名)

打群れて飛ぶ千鳥。

ともり

吃(名)

さる事。又は其人。

ともる

燈(自動四段)

燈火の附く。●さほる。

ともる

吃(自動四段)

言語のつかへて思ふやうに言へ

ともかみ

友鏡(名)

合はせ鏡。(後撰)

ともがら

輩(名)

同じ仲間の人。●同輩。●同類。●

ともかくも

傍輩。

ともかくも

(副)

兎にかくにも。●何れにしても。

ともかくも

●さにかく。

ともがき

友垣(名)

友達。●朋友。

ともがしら

供頭(名)

武家の役名。供廻りの頭。

ともかせぎ

共稼(名)

一家族おのゝ分業して稼ぐ事

《俗》

ともたち

友達(名)

友たる人々。●朋輩。●朋友。

ともぞろへ

供揃(名)

供廻りの勢揃。

ともつな

纜(名)

鈴の轡に附けたる繩。繋ぎさむる用

の物。

ともつひと

友っ人(名)

ともひと
友人に同じ。(堀川)

ともね

輦音(名)

輦に弓弦の觸るゝ音。○堀川「引き放つ手束の弓の矢を早み輦音に的の鳴りかばす哉」

はす哉」

ともね

共寐(名)

同衾。●ひとつね。

ともなひ

伴(名)

伴なる事。

ともなふ

伴(他動四段)

引き連るゝ。●同道する。

ともなふ

伴(自動四段)

連れだつ。●付き添ふ。●

随ふ。

ともりの

供乗(名)

騎馬にて供をする事。又其騎者。

とものを

伴緒(名)

緒は借字にて長の略。○朝廷に奉仕する一族々々の長官。○祝詞式「比禮

かかる伴の緒」たすきかかる伴の緒(以上

とものみやつこ

女官) 靱負ふ伴の緒「太刀佩く伴の緒」(以上男官)

伴造(名) 「一」上古職業を以て朝廷に仕へたる其一族の長者。……地方には國

造ありて其部下を治め。官職には伴造ありて其部下を管す。「二」主殿寮の下吏。……

このしりのさものみやつこを見よ。

共食(名)

動物の同類相食する事。

供待(名)

「一」他の家に行きたる主人の歸りを供の待ち居る事。「二」供待をする扣所。

供廻(名)

供の人數。●供の同勢。

友舟(名)

同じ海上または河、湖などにある他の舟。○夫木「湊を出づる友舟は」

巴。輦繪(名)

上古輦に畫がきたる形故に云ふ。

◎紋の名。水の渦まきたる形にて今は専ら太鼓に畫がき。又八幡神社などの紋に常にあるもの。……「つ巴、二つ巴、三つ巴、右

巴、左巴等の別あり。

巴五(名)

巴の紋を附けたる瓦。

副)

こまれかくまれ。●何れにせよ。●こ

に。かく。

ともあかはら

ともあれ

四一五

ともあらしひ

友争(名) 仲間同士の争ひ。●同士打。

ともし

燈(名) 「一」燈火。「二」燈油。

ともし

照射(名) 太陰曆五月の頃。獵師が山に入りて

松明を焼き鹿を招き寄せて射る一種の獵。

之に用ふる松明を火車(はぐり)といふ。○千載「さ

もしする火車の松も消えなくに外山の雲の

あけわたるらん」

ともし

乏(形。形状言シク活) さほしに同じ。少なし。

○盛衰「我君の御恩にて若きより衣食にさ

もしからず」「二」珍らし。○萬葉「越の海

のたゆひの浦を旅に見ればともしみ大

和しぬびつ」「三」羨まし。○萬葉「あさも

よし紀人ともしも待乳山ゆきくさ見らむ紀

人ともしも」

ともしつま

乏妻(名) 稀に逢ひて故珍らしき妻。●

七夕の織女。○夫木「天の川くらしかれた

るともしつま渡りをいそぐぬさ手向くな

り」

ともしら

友白髪(名) 夫婦諸共に白髪になるまで長

命する事。

ともしづる

(自動四段) ともしく思ふ。(萬葉)

ともしび

燈火(名) 明りを取るために燈したる火。●

ともし。●あかし。●あかり。

ともしびの

燈の(枕) 燈の明るき意にて明石(地名)の

枕詞。○萬葉「ともし火の明石大門に」

ともしびのはな

燈の花(名) ちやうじがしら。

ともびど

友人(名) 朋友。●いうじん。

ともびど

供人(名) 供の人。●従者。●従僕。

ともぜつ

供勢(名) 供の人数。

ともす

燈(他動四段) 明りを取る爲に火を燃やす。●

さぼす。●點火する。

ともずり

友摺(名) 木竹の類の風の爲互に擦れあふ

事。○夫木「ふきすぐる葉風はさても萩原

やなほともすりのおさのさびしき」

ともすれば

(副) やいもすれば。●又しても。●時に

ふりては。●ごうするさ。○六帖「秋の

野は道もゆかれずともすれば花のあたりに

目のみさまりて」

とせ

歳。年(名) 年經の約音。◎年を數ふるにいふ調。

とせつ

○「ひささせ」「みさせ」「よさせ」「ちさせ」

とせつ

渡世(名) よわたり。●生業。●營業。

とせつ

土星(名) 太陽系に屬する遊星の名。

とせん

渡船(名) 渡し船。

とぜん

徒然(名) つれづれ。●無聊。△(形)―徒然な

る。(又)―徒然の。(副)―徒然に。

とせんば

渡船場(名) 船渡しする所。●渡場。

とす

度(他動サ變) 「一」佛の力にて衆生を救ふ。●濟

度する。「二」僧籍に入る。●得度する。

どろ

度数(名) たびりす。●回数。

